とある白き翼の奮闘記録

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある白き翼の奮闘記録

【Ｎコード】
Ｎ５６０７Ｗ

【作者名】
ノッポガキ

【あらすじ】
上条当麻と御坂美琴。もし二人がベツヘレムの星の中で出会っていたら、美琴がインデックスと会話し、魔術の存在を知ったら、そして、二人が異世界に飛ばされてしまったら。
そんな考えの下に始めてみました。とある魔術の禁書目録と魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。
禁書は２２巻終盤、ネギまは４巻冒頭から始まります。
禁書キャラは上条と美琴以外はほとんど登場しませんのでご了承ください。あと、上琴を認められない人はスルー推奨です。

原作は読んでいただいたほうがいいと思いますが、未読の方でも読めるようなものを目指します。
あまりグロイものにはならないと思います。
白き翼はしばらく出ないと思います。スイマセン。
警告タグ追加しました。まあ、心配するほどじゃないと思いますが。

プロローグ　終わりの始まり（前書き）

まだネギまのキャラはほとんど出てきません。ご了承ください。
プロローグは２２巻の改変です。

プロローグ　終わりの始まり

第三次世界大戦、科学と魔術の戦い。

とある少年――上条当麻はローマ正教、神の右席のリーダーである右方のフィアンマを打ち倒していた。

だが、その数分前、あるイレギュラーが起こっていた。

美琴「やっと……たどり着けた」

常盤台のエース、御坂美琴がベツヘレムの星にたどり着いていたのだ。

ここまでいっしょに来ていたミサカ１０７７７号だが、ＶＴＯＬ戦闘機が損傷したため、やむ終えず着陸している。このとき、彼女に地上へ戻るすべはなかった。

美琴「さてと、あのバカはどこにいるかしら」

美琴は上条を捜しに来たのだが、ベツヘレムの星は広く、なかなか見つからない。

美琴「うーん、もしかしたら外側にいるのかもしれないわね」

この少女は結構鋭い勘を持っていたりする。

美琴「でも、どうやって上に行けばいいのか……ん？」

そのとき、美琴はある物体を見つけた。
円筒の形をし、側面には記号がかいてある物体――――禁書目録の制御霊装を。

美琴「？　なにかしら……え！？」

制御霊装は突然光りだし、空中にさかさまに浮いた少女――インデックスを投影した。

インデックス『え！？　短髪！！？　なんでここにいるの！！！！？？？？』
美琴「それはこっちのセリフよ！？　ていうかなんで逆さまなの！？」

少女達はしばらく言い合いをしていたが、不毛だと気がついたのか、美琴は話題を変える。

美琴「で、シスターは何でそんなことになっているの？」
インデックス『え、えと……それは』
美琴「言いたくないなら別にいいわよ、無理やり関わるけどね」

インデックスは、美琴の瞳にどこかで感じた色を見た気がした。

インデックス『……短髪、もし誰かが地獄のそこまでついてきてくれるって言ったらどうする？』
美琴「そんなこと聞いてどうするの？」
インデックス『答えてくれる？』

インデックスはとある少年の前で見せた笑顔と同じ笑顔をした。あの、悲しい笑顔を。

美琴「そんなの決まっているじゃない。地獄の底から引っ張りあげるだけよ」

何の迷いも無く、彼女は答えた。あの少年と同じように。

インデックス『……（あの人と、同じだね）……短髪……ううん、短髪、話を聞いてくれる？』

美琴「はじめからそういっているでしょ。あと私の名前は御坂美琴よ」

インデックス『わかったよみこと、それじゃあ私のことも名前で呼んでね』

美琴「分かったわ、インデックス」

インデックスは語り始めた。上条当麻との出会い、自分のために戦ってくれたこと、魔術師のこと、ローマ正教を相手に色々な人たちを助けるために戦ってくれたこと。そして、自分を助けるために、自分と戦ったことを。自分が、巻き込んでしまったことを。

美琴は、何の冗談かとも思ったが、今この状況、大天使、ここに来るまでにあった色々な出来事が魔術の存在を肯定していることに気がついた。そして、インデックスの話し方に違和感があったことにも。

美琴「……インデックス、あんたはあの事を知っているの？」

インデックス『……私は……うん、知っているんだよ」

美琴「……インデックス、私はあなたが気に病む必要は無いと思うわ」

インデックス『どうして！？　みことはそういいきれるの！！？？」

美琴「アイツは、上条当麻はあなたに謝ってもらうためにあなたを

助けたの？」
インデックス『！？』
御坂美琴は前に上条当麻本人から、記憶を失っても戦い続ける理由を聞いたことがある。そして、その時に気がついた感情を胸にここまで来たのだ。彼女も、間違ったことを言ったと思っている。だが、彼は謝ってもらうために戦っているわけでないことも理解している。
美琴「アイツのことだからあなたに謝るでしょうね。で、あなたはどうするの？」
インデックス『……そんなの決まっているんだよ」
美琴「そう……ならいいわ」
インデックス『みこと……当麻のことをたのむんだよ。私は学園都市に帰らないつもりだから』
美琴「それはあなたが自分の口で言うべきことよインデックス。ちょうど誰かさんもきたみたいだしね」
美琴のいったとおり、美琴の後方から上条当麻がやってきた。
上条「み、御坂！？　何でここにいるんだよ！！！？？？」
美琴「アンタを助けに来たに決まってるでしょ！？」
すぐに言い合いをはじめそうになる二人、だが、美琴はそんなことをしている場合ではないと思い出す。
美琴「アンタ、あの子に言うことがあるんでしょ、私は向こうに行っててあげるから早く済ませなさい」
上条「お、おい！」
美琴「アンタが自分の意思でここに来たように、私も自分の意思でここにいるのよ、言っておくけど、私は何を言われたってアンタを

置いて帰るつもりは無いから」

そう言うと、美琴は少し離れた位置に行く。

インデックス『とうま、みことを責めないであげて欲しいかも。みことはとうまと同じように誰かを助けるためにここまで来たんだから』

上条「……そうだな、それに俺にそんなことを言う資格なんてないよな……インデックス、俺の話を聞いてくれるか？」

インデックス『分かったよ、とうま』

上条「お前にひどい事してきた、俺がお前に隠し続けていたことを、自分の口で、今から話す。無事に帰れないからこそ、今」

上条は話し始めた。とても怖かった、だが、勇気を持って話し始めた。

上条「俺は」

「

」

長い言葉を。

インデックス『もういいんだよとうま。自分ひとりで背負い込まなくて』

上条「でも、俺は！」

インデックス『とうま、私は学園都市にはもどらないんだよ』

上条「え？」

インデックス『わたしはとうまをもう巻き込むわけにはいかないん

だよ』
上条「……だけど、お前はどうなるんだ？」
インデックス『……とうまが私に謝りたかったみたいに、私にも謝りたい人たちがいる。私が守りたい人たちもいる……とうま、これから先は私が自分の力でやりたいんだよ、誰かに守ってもらうんじゃなくて、自分の手で誰かを守れるようになりたいんだよ』

インデックスは決意した、きっと今も自分を守っている人達がいる。学園都市の天使や、炎の魔術師、極東の聖人。そして、自分が今まで接してきた大切な友人達、家族と呼べる人々、小さな先生、吸血殺し、少年の両親。そんな人たちを守れるくらいに強くなりたいと少女は願う。

上条「だけど、俺はお前に直接謝りたい」
インデックス『……そんなのいいよ。だけどとうま、まだ謝り足りないなら一つだけ約束して欲しいんだよ』
上条「なんだ？」
インデックス『とうま、みことを……絶対に守ってあげて』

上条は思い出す、アステカの魔術師との約束を。

上条「お前に言われるまでもねえよ、俺は約束してんだ、御坂美琴とその周りの世界を守るって」
インデックス『……やっぱり、とうまはとうまなんだね』
上条「どういう意味だよ！？」
インデックス『……はぁ……』
上条「なんだよその諦めたようなため息は」
インデックス『なんでもないんだよ……でもとうま、ちゃんと約束してみことを守ってあげるって』
上条「ああ、約束する」

上条はインデックスに通信装置の周波数を教えると、制御霊装を破壊するために近くに寄った。

上条「じゃあ、元気でな」
インデックス『とうまも元気でね』

そして、上条の右手が……触れた。

何かが割れるような音が響いたのと同時に、インデックスは自分の体に戻った。

美琴「終わったみたいね」
上条「ああ……これから最後の戦いがはじまる、逃げるならいまのうちだぞ」
美琴「覚悟は出来ているわよ、どうせアンタは最後まで戦うんでしょ。だったら私も最後まで付き合うわよ」

美琴は真っ直ぐに上条を見据える。その目に迷いは無かった。

上条「はぁ、何言っても無駄みたいですね」
美琴「当たり前でしょ、じゃなかったらここまで来ないわよ」
上条「後悔するなよ」
美琴「そっちこそ」

二人はステイルの指示で上昇用霊装を破壊して回っている。被害を最小限で食い止めるために。
上条の右手で破壊し美琴の能力でモノレールの制御を確実に行う。より迅速に。

九番霊装へ向かう途中、スピーカーから焦りのこもった声が聞こえた。

ステイル『なぜ、ミーシャ＝クロイツェフが！！？？』

大天使『神の力』正確な名前はガブリエル。信者でなくとも知っているであろう有名な天使である。
女性の姿をした天使は莫大な氷を求めて極点に向かってく。

上条「クソッ……（どうする、美琴がいる以上下手な動きは）」
美琴「何を迷っている暇があるの……」

「アイツを止めるわよ」

上条「！？　……ああ、そうだな」

この少女はすでに覚悟が出来ていた……なのに自分は何を迷っていたのだ。約束したではないか。彼女を御坂美琴を必ず守ると。

上条「いくぞ御坂！」

ベツヘレムの星を確実にガブリエルの真上に持ってくために、美琴が演算をする。そして、上条が美琴の指示で霊装を破壊していく。

そして、ついにガブリエルの真上にベツヘレムの星は到着した。

上条（記憶をなくしてから色々なことがあった。まだ、半年も経っていないけど本当にいろんなことが。ほとんどは魔術がらみだったど……そういや、御坂の時だけは魔術がらみじゃなかったな）

上条の頭の中に色んな人々の顔が浮かぶ。友達、家族、先生、今まで戦った人間、助けられなかった人、純白のシスター、そして、自分の傍らにいる少女。

美琴（最初はただむかつくだけだったと思う。何度も勝負を挑んだ、何度も助けられた、いっしょに戦った。どうしても助けたくなった……コイツと、上条当麻といっしょにいたいと思った）

美琴の心の中に色んな思いが浮かんできた。そして、その思いはただ一点の共通点を持つ、それはこの少年の対する思いだった。

二人は、自分の信じたとおりに進む、悲劇的な結末を迎えないために、誰かを守るために、そして、自分自身のためにも。

深く突き進んだ影はドン！！！！！！！！！　と衝突した。そして……

……

上条当麻と御坂美琴。二人はこの世界から消失した。

イギリス

インデックス「とうま……なんとなくだけど分かっていたんだよ、もう、帰って来れないって。この世界は私達が守るから、とうまは

幸せになってもいいんだよ………みこと、とうまをよろしくなんだよ」

　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○

？？？「む、なんだこの反応は？」

金髪の美少女、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは学園に侵入した謎の力を持った二人組を感知した。

エヴァ「……魔法使いではないようだが………ジジイに連絡しておくか」

上条「いてててて、どこだココ？」

上条の目の前には異国のようでありながら、日本語の看板が並ぶ町の風景が広がっていた。

上条「え？　ココどこ!？」

上条当麻と御坂美琴、二人が魔法先生と交差する時、物語は始まる！

プロローグ　終わりの始まり（後書き）

出来る限り、はやく第1話を更新します。
上条さんはある程度強くなる予定です。キャラプロフィールはまたいずれ。

第1話　魔法使い達との出会い（前書き）

プロローグはシリアスな感じで作りましたが、これから明るい感じの話になっていくと思います。時間軸は第四巻冒頭で、ネギとエヴァが会話している辺りです。
キャラの口調がおかしいことがあると思いますがご了承ください。

第1話　魔法使い達との出会い

エヴァ「さて、どうしたものか……」

エヴァンジェリンはとある理由により麻帆良学園を守護する役目にある（本人は不本意だが）。
そのため、学園の結界に誰が侵入したのか分かるのだ。
ちなみに、学園長に報告したところ、自分でやれといわれたのだ。
理由は場所が近いから。

？？？「どうしました？　エヴァンジェリンさん」

悩んだ表情をするエヴァに話しかける赤毛の少年の名前はネギ・スプリングフィールド。
１０歳の年齢で中学校の教師をしている子供先生である。ちなみに、魔法使いでもあり、彼の父親は魔法世界の英雄だ。

ネギ「なんか、難しい顔をしていましたよ」
エヴァ「ふむ、ちょうどボウヤがいることだし見てきてもらうとするか」
ネギ「何の話ですか？」
エヴァ「なに、侵入者がいるからちょっくら偵察して来い」
？？？「ちょっと、エヴァちゃんいきなり過ぎない？」
？？？２「マスター、そもそもソレはマスターのお仕事だと思うのですが」

今、話しかけた二人の少女……いや、一人の少女と一体の女性型ロボと言うべきだろう。
少女のほうは神楽坂明日菜、魔法無効化能力を持ったオッドアイの

少女だ。
ロボのほうは茶々丸、フルネームで呼ばれることはまず無いので割合。実年齢は３歳ほど。
エヴァを含めた三名はネギが担任の３－Ａの生徒である……もっとも、実年齢は中学生で無いものばかりだが。明日菜については良く分からない部分が多いため、割合させていただくが、精神年齢は見た目どおりだ。あとバカ。

明日菜「ほらほら、エヴァちゃんも行くわよ」
エヴァ「ちょっとまて神楽坂明日菜！　私は行くとはいっていな……」

エヴァが反撃しようとするが、元々力を封じられている上、明日菜の能力で魔法を使えない哀れな吸血鬼……ちなみに実年齢は３００歳を超えているらしい。見た目の年齢は１０歳の幼女だが。
茶々丸「マスター、諦めも肝心かと」
エヴァ「なんだ、その卓越した人生観はー！？　お前３歳だろうが！！？？」

こうして、四人は侵入者の偵察に向かったのだった。

○○

上条「ど、どこだここはー！！！！？？？？」

上条は絶叫した。北極海に落ちたはずが、何故か日本にいたので無理は無いが。

美琴「うるさいわね……ちょっとはしず……か、に……どこよここ――――！？？」

美琴も目を覚まし、今いる場所に驚く。

美琴「え、何でこんなところにいるのよ私達？」

上条「上条さんも説明していただきたいのですが……」

パニックに陥っている二人。まあ、無理も無い話だが。

と、そこに現れる四つの人影。コレ幸いと上条は話しかけるがのだが……

上条「すいません、ここっていったいど、こぉおおおお！！？？？」

いきなり茶々丸の武装が火を噴いた（もちろん、エヴァが命令したから。茶々丸自体はいい人です）。

茶々丸「すいません、マスターの命令ですから」

美琴「ちょっと！　いきなりなにすんのよ！？」

美琴は反撃しようと帯電し始めた。

ネギ（まさか魔法使い！？）

エヴァ（変だな？　魔力や気を微塵も感じないぞ）

エヴァが不審に思うのもそのはず、美琴が使っているのは超能力。

彼らの知っている異能の力とは別物である。気は異能かどうか微妙だが。

ネギ「ま、待ってください僕達は争うつもりなんてありません！あなた達が何の目的でこの麻帆良学園に来たのかを聞きたいだけです」

平和主義者の毛が強いネギ。その言葉に偽りがないと思った上条は答えた。

上条「あのー、できれば俺らもここがどこだか教えていくれるとありがたいんだけど……」

ネギ「え！？」

明日菜「ここは麻帆良学園ていう学園都市だけど……」

上条＆美琴「「麻帆良学園？」」

エヴァは少し思案した、この二人は明らかにここのことを知らないと、だが、二人から妙な力を感じるのも確かなのだ。特に男のほうは不可解な何かを感じる……だが、この二人の目はネギや明日菜と同じお人よしの目だった。

エヴァ「厄介なことになりそうだな」

とりあえず、二人を学園長室まで案内し、そこで詳しい話を聞くことにしたエヴァ。

ネギ「ここが学園長室です」

ドアの向こうにいたのは一人の老人。その姿をみた二人は一言。

上条＆美琴「「ぬ、ぬらりひょん！？」」
学園長「き、傷付くのぅ」
学園長の頭は後ろに長いので無理も無いが。
エヴァ「この二人が私の話した侵入者だ。二人とも妙な力を持っているようだが……明らかに一般人の気配がするのが妙なんだが」
後半は声を小さくし、学園長に報告するエヴァ。
学園長「ふむ、まずはそなた達の話を聞かせてもらおうかの、我々についてはその後ということでよいじゃろうか？」
上条は少し考え、ほかに頼るところも無く、とりあえず話を聞いてもらったほうがよさそうだと考える。
上条「ええ、少し長くなりますけど実は――」
上条はとりあえず、自分達が超能力を開発する学園都市から来たこと、ロシアが起こした第三次世界大戦で自分が首謀者と戦っていたこと、ローマ正教の魔術師との戦い、そして、大天使ガブリエルを倒した後、気がついたらここにいたこ戸などかいつまんで説明した。
学園長「おかしいのう、第三次世界大戦など起こっておらんし、魔術師ではなく魔法使いと呼ぶはずなんじゃが……それに学園都市がほかにあったかのう？」
上条「え？　そんはずは無いですよ！？」
学園長「それに、そういった話を真面目に受け取るとおもったのかのう？」

上条「いや、そっちの子供が杖をせおっているから……てっきり魔術師なのかと」
学園長「……なるほどのう、観察眼はあるようじゃな……ワシとそこのネギ君、それにエヴァは魔法使いじゃ。そして、おそらくそなたらのいた世界とここはまた異なる世界なのじゃろうな」

学園長は自分の推論をまとめ、上条たちに伝えた。

美琴「それってパラレルワールドのこと？」
学園長「どこから時代が分岐しているかにもよるがの。ワシの推論では異世界といったほうが正しいと思うのじゃが」

色々なことをいっぺんに言われて頭が混乱する美琴。正直、インデックスに魔術のことを聞いていなかったら信じることなんて出来やしなかっただろう。
対して、上条はなれているようだが、おきまりの言葉を一言。

上条「ははは、不幸だ……」

とりあえず、学園長はこの世界の歴史を話し、美琴が自分達の世界の歴史と照らし合わせる。それで分かったことは表の歴史自体には大差が無いが、近代の歴史が違う箇所が多いだけとなった。あくまで、表の話であるが。

次に、上条と美琴は自分達の力について説明する。
美琴の持つ能力『超電磁砲』
上条の持つ能力『幻想殺し』
この二つを実践して見せたが、エヴァがこんなことを言い放つ。

エヴァ「おい、そこの小娘、この女に電撃をあててみろ」

美琴「何よ小娘って。私には御坂美琴って名前があるのよ！」
エヴァ「小娘は小娘だ。それに私は３００歳を超えているぞ」
学園長「エヴァは吸血鬼の真祖なんじゃよ」

この言葉にビックリしたのは美琴ただ一人。

学園長「なんじゃ？　上条君はビックリせんのかね？」
上条「まあ、俺達の世界にもいるらしいですから……（吸血鬼を殺す能力者もいるし）」
美琴「え？　いるの！？」
上条「いるらしいぞ。あったことは無いけど……あったことがある奴が知り合いにいるし」

エヴァ「まあ、そんな話はどうでもいい。とっととこの女に電撃を浴びせろ」
明日菜「エヴァちゃん、私に電撃を浴びせたがるの！？」
エヴァ「ちょっとした実験だ。そいつの右手が魔法無効化能力とは別物かどうかを確かめるためのな」
上条「魔法無効化能力？」
エヴァ「一部例外を除きあらゆる魔法を無効化する能力のことだ」
上条「一部例外？」
エヴァ「ああ、回復や身体強化は有効だった」
上条「……うらやましい」
エヴァ「どういうことだ？」
上条「上条さんの右手は有害無害問わず打ち消すんですよ……だから神様の加護とかも打ち消して万年不幸人生ですよ」

苦虫を噛み潰したような表情になる上条。

エヴァ「……とりあえず、弱めに電撃をながしてみてくれ」

美琴「まあ、静電気レベルなら平気だろうし」
明日菜「ああ、拒否権はないのか」

バチッと弱い電撃を明日菜に流す。

明日菜「うわっ、ビリッと来た！？」
エヴァ「どうやら、超能力は無効化できないようだな。よしボウヤ、その男に魔法を何でもいいからぶつけてみろ」
上条「え？」
ネギ「すいません、失礼します！」

魔法の射手を放つネギ。上条はとっさに右手で防御する。すると、魔法は相殺された。

エヴァ「なるほど……無効化ではなく、相殺のようだな」
ネギ「すいません、怪我はありませんか？」

子供は時として残酷である。

学園長「さて、これからどうしたものかの」

とりあえず、二人には学校に通ってもらうとして、一体どこのクラスに入れるべきかを考え始める学園長。
学園長「美琴ちゃんは頭がよさそうじゃしの、ネギ君のクラスに入ってもらおうかの。上条君は……とりあえず適当な高校に入れておくかの」

こうして、上条当麻と御坂美琴は麻帆良学園であらたな物語をつむぎ始めた。

第1話　魔法使い達との出会い（後書き）

説明ばっかでスイマセン。
次回からは美琴の転入の話と修学旅行編の導入。
美琴の買い物に付き合う上条さん（つまりはデート）などを予定しております。しばらく上条さんは出番が少なくなると思いますが、ご了承ください。

第2話　驚愕、転校生は超能力者！？（前書き）

今回は美琴がメインです。
３－Ａと絡む美琴を出します。
ちなみに、タイトルどおり魔法世界編までは続ける予定だよ。
今回、少し暴走気味です。
ちょっと、原作と時間軸が違うかもしれませんが、矛盾が出るほどではないと思います。

第2話　驚愕、転校生は超能力者!?

美琴「どうしよう……」

美琴は悩んでいた。論理感とか体裁とか恥ずかしいとか……色々。
原因は数時間にさかのぼる。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○

学園長「では、美琴ちゃんはネギ君のクラスに入ってもらうということで」

美琴（もといた世界と季節が違うけど……私2年生なのよねー、いいのかなそこらへんは）

ちなみに、ネギが教師だということは説明済みである。しばらく思考停止するほど驚いていたが。

学園長「上条君は適当な高校に所属してもらおうと思うのじゃが……そうじゃの、しばらくネギ君の手伝いをしてくれると助かるの」
上条「ネギ先生のですか？」
学園長「うむ、実はの数日後に３－Ａは修学旅行を控えておるのじゃが、京都の先方がかなり嫌がっておっての、君にはネギ君が特使としての任務を達成するのを手助けして欲しいのじゃ」
上条「まあ、お世話になる身ですからいいですけど……なんで俺なんですか？」
学園長「それなりに場数を踏んでおるようじゃし、こちらも派遣で

きるものが限られておるのじゃ。そこで、君にはネギ君といっしょに特使として京都に行ってもらいたいのじゃ。君の力は我々魔法使いに対しての切り札となりそうだからの。給料も出すぞい」

こうして、上条はネギの手伝いをすることに。

学園長「それで、今後二人が住むところじゃが――――」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

二人が住むところ、それは……教師達が多く住んでいるエリアにあるアパートの”一室”つまり、同じ部屋で二人は暮らすことになったのだ。

部屋の内装は、女子寮の部屋とおなじものである。

美琴（どうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう）

かなりテンパっている美琴。対して上条は。

上条「今日はもう遅いし、これからのことは明日考えようぜ」

美琴「……」

そういいながら、二段ベッドの下に入る鈍感少年上条当麻。ココまで来ると美琴がかわいそうである。

美琴「そうね、おやすみ……」

二段ベッドの上に行くツンデレ少女御坂美琴。いい加減素直になれ

ないものか。

だがしかし、以前の上条当麻の生活を覚えているだろうか。彼はインデックスがベッドを使っていたため風呂場で寝ていたのだ。そして、久しぶりにベッドで寝れるためあまり深く考えていなかったが、すぐ近くに客観的に見ても美少女の御坂美琴がいるのである。男ならここですぐ寝るわけは無い。この状況がどういうことなのかすぐに分かるはずだ。

上条（しまった――――――！！！？？？　あまり深く考えていないけどコレって同棲！？　いや、まてインデックスと同じようなものだ。そうだ同居だ。同居なんだこれは）

実は純情少年の上条。あまり大差ないことには気がつかないのはテンパっているからかそれともバカだからか。

上条（落ち着け落ち着け……御坂だって男と相部屋なんて嫌だろうし深く考えないようにしておこう）

そもそも嫌だったら相部屋に文句を言うはずなのだが、そんなことには気がつかないようだった。

しばらくすると、疲れがたまっていたせいか、眠りに落ち始めた上条。

すると誰かが動く音が聞こえ、上条は少し耳を傾ける。

上条（御坂がトイレに行ったのかな？）

美琴「……当麻、眠っちゃった？」

上条（？　御坂だよな……あれ？　名前で呼ばれたことって有った

っけ？）

上条は疑問に思ったが眠気には勝てず、返事はしなかった。

上条（！！！！！！！？？？？？？？？）

美琴「そ、それじゃあ……お邪魔します」

なんと、美琴は上条の布団にもぐりこみ添い寝を始めてしまった。

上条（みみみみ、御坂さーん！？　いったいこれはなんのまねでせうか！！？？）

美琴「えへへへへーあったかーい」

上条（あったかいじゃなくて、いいにおいがする……じゃなくて！　御坂がえがおで可愛い………じゃなくて！！？？）

何が起こっているのかわからなくてビックリする上条。

美琴「えへへ、もう離さないんだからね……当麻、だいすきー……すーすー」

衝撃的な言葉を残して眠ってしまった美琴。だがしかし、上条は全部聞いてしまったわけで。

上条（え！？　え？　えええええ！！？？）

結局、上条は一睡も出来なかった。

〇〇〇

美琴「ほらー、早く起きなさい。転入初日に遅刻なんてシャレになんないわよ」
上条「うう……御坂か……み、御坂！？」
美琴「なにを驚いているのよ」
上条「い、いや、なんでもない」
美琴「？　まいいわ、私は先に行っているからご飯食べたらちゃんと学校に行くのよ」

そういうと、美琴は学校へ行ってしまった。

上条（どうしよう……昨日のアレは夢だったのだろうか……でも、夢じゃなかったとしても今は知らないフリをしたほうがよさそうだな。おれが寝ていると思って話したことみたいだし、まずは目先の問題からだな）

恋愛面以外は割と鋭い上条。デリケートな問題であるため、まずはこの世界になれてから考えることにした。

上条「……次、かおあわせた時どうすればいいんだ？」

なんだかんだで、異性として意識し始めたようだった。
ちなみに、彼の登校風景や、学校生活は特に何も無く普通に過ぎていった。

上条が悶々としている頃、美琴は試練を受けていた。

ネギ「今日から皆さんのクラスメイトになる人を紹介します」

美琴はドアを開け、教室に入っていく。
美琴「転校生の御坂美琴です。これからよろしくお願いします」

３－Ａのほとんどが大声で歓迎の言葉を上げる。
あまりの音量に美琴はたじろぐ。
美琴（常盤台とはまた違ったタイプの女子高ね……まあ、気楽にやっていけそうだからいいけど）

３－Ａを代表し、委員長の雪広あやかが美琴にあいさつをする。
あやか「御坂さん、３－Ａにようこそ。私はこのクラスの委員長、雪広あやかですわ。困ったことがあれば何でも聞いてくださいな」
美琴「よろしくお願いします」

美琴が頭を下げようとした時、報道部、朝倉和美が手を上げた。
朝倉「はいはい、それじゃあ恒例の質問タイムいってみようか」

「「「「「イエ――――ィ！！！！！！」」」」」

美琴「！？」
風香「はいはいーまずはボクからねー！」
美琴（ネギ先生ぐらい小さいけど……中学生だし無くは無いわよね）
風香「美琴ちゃんは彼氏はいるんですか？」
美琴「ぶふぉ！！？？」

思わず吹いてしまった美琴。だが、この反応を見た３－Ａ女子は面白そうな話を見つけたと言わんばかりに次々と質問をぶつけた。

彼氏はどんな人なのかとか、どのくらい好きなのかとか、告白はどっちからとか。

３－Ａ女子は美琴の反応から、付き合ってはいないが、凄く好きな人はいるのだろうと予測をつけた。そして、美琴が典型的なツンデレであることも。

美琴「……疲れた」

明日菜「大丈夫？　美琴ちゃん」

美琴「あ、神楽坂さん」

明日菜「明日名でいいわよ。ごめんね、うちの女子こういうことに目が無いから」

美琴「ははは、私が通っていたところはもっと静かなタイプのところだからなれていないだけですよ」

明日菜「へー、そうなんだ……それにしても、美琴ちゃん」

美琴「なんですか？」

明日菜「上条さんのこと大好きなんだね」

美琴「！！？？」

明日菜「上条さん、見た感じ鈍感そうだけど頑張って！　私は応援しているから！！」

美琴（次、アイツと顔合わせるときどんな顔すればいいのよ……）

明日菜も恋バナには目が無かったようだ。

ネギ「あ、上条さんこっちです！」

いま、ネギ、明日菜、学園長の孫で明日なの親友の近衛木乃香は修学旅行で必要なものを買いに出かけており、途中、上条と合流することにしていた。

上条「すまんすまん、道に迷って少し遅れちまった」
ネギ「いえ、僕達も今さっき、きたばかりなので」

ネギと上条が会話している後ろで、明日菜が木乃香に上条について説明する。

明日菜「えっと、あの人は上条さんって言って……」
木乃香「ああ、なんとなくわかったえ」
明日菜「え！？」
木乃香「上条さんでしたね、始めまして、学園長の孫で明日なの親友の近衛木乃香といいます」

木乃香は上条に挨拶する。

上条「あ、どうも。上条当麻です」
木乃香「あなたが噂の美琴ちゃんの恋人ですね」

上条&美琴「「ぶふううう！！？？」」

思いっきり動揺してしまう二人。

上条「ななななななな、なにをいっているんでせうか！？　上条さんは今まで誰とも付き合ったことにですことよ！？」
美琴「そそそそそそそそ、そうよ！！？？　木乃香さんななな、何言ってるの！！！？？？」

木乃香「あれ？　ちがうん？　おにあいやのにー」
明日菜（上条さんのこの反応……脈ありみたいね。私の勘だとネギと同じで鈍感のフラグ体質だと思ったんだけど）
女の勘はかなり鋭い。
ネギ「時間もありませんし、早く行きましょう」

必要なものを買い揃えるため店の中を回る一行。ある程度自分達の物を買った後、木乃香がネギの服を選んでいた。
上条（なんですか、なんでですか、なんでなんですかー！？　一体此の空気はなんだー！！？？）
現在、上条と御坂は二人で店の外で待っている。お互いに無言で気まずいような、気恥ずかしいような変な空気が流れている。
美琴（ううー、あんなことがあった後だから意識しちゃうじゃないのよ……）
お互いが意識してしまっているためか、言葉が出てこない。だが、美琴は意を決して話しかける。
美琴「あ、あのさ……」
上条「な、なんだ？」
美琴「アンタは私の彼氏だと思われるのって迷惑だった？」
上条「そんなわけ無いだろ！！」
美琴「え（カァァァァ）」

上条「あ（カァァァァ）」

二人はしばらく赤くなったまま動かなかったが、店の中で明日菜の怒声や、誰かの悲鳴が聞こえた。
ただ事ではないと思い、二人は我に帰る。そして、店の中に突撃したが、目の前の光景は……

木乃香「カード欲しかったなー」
ネギ「あはははは」
明日菜「このエロオコジョがあー！！！！」
？？？「あ、姐さん許してくれー！！？？」

なんか、カオスなことになっていた。いや、ソレよりも。

上条＆美琴（（オコジョが喋っている！？））

更に波乱の予感のする二人だった。

第2話　驚愕、転校生は超能力者！？（後書き）

上条さんの出番は予想以上におおくなりました。
この分だと、修学旅行に行く前にデレさせるかも。
そうなった場合、フラグ体質の上条に嫉妬する美琴を書くと思う。
次回はカモ君とパクティオーの話だよ。
上条さんと美琴のパクティオーカードがあるとしたら、アーティファクトはなにがいいんだろうか？　パクティオーなしで行くかも知れんけど。

第3話　カモとパクティオーとキス！？（前書き）

今回はパクティオーの説明回です。
ついにデレるのかレールガン！！

第3話　カモとパクティオーとキス！？

カモ「オレっちの名前はアルベール・カモミール。ネギの兄貴の使い魔だ」

喋る白オコジョ、カモ。ちょっとオヤジくさい雰囲気の精霊である。
現在、上条と美琴は自分達の部屋でこの白オコジョの正体を聞いていた。

カモ「ネギの兄貴に助けられて、借りを返すため幾千里……」
明日菜「ただのエロオコジョだから気にしないで」
カモ「ひどいっすよ姐さん！？」

実際そうなのだから仕方が無い。

上条「さすがの上条さんもここまで不思議なものは見たことないからビックリしているんだが」
ネギ「僕からしたら、本物の大天使に遭った事があるほうが……ましてや、倒したことがあるほうが驚きですよ」
美琴「なんだか、もうついていける気がしないわ」
明日菜「美琴ちゃん、人間ってなれるものなのよ……」
美琴「苦労してるのね明日菜」
カモ「オレっちを無視しないでくだせえよ」

収拾がつかなくなる前に、カモは本題に戻るように話しかける。

上条「ああ、そうそう。何であんなことになっていたのかってことだ」

上条が言っているのは買い物をしている最中に起きたカオスな出来事のことだ。

カモ「いやー、木乃香の姉さんに、ネギの兄貴とパクティオーをしてもらおうかと思って」

上条「パクティオー？」

カモ「おうよ、魔法使いの従者――パートナーとかわす仮契約のことさ。ちなみに明日菜の姐さんは兄貴のパートナーだぜ」

美琴「そうなの？」

明日菜「まあ、色々と事情があるのよ」

なぜか、明日菜の顔が赤くなっており、美琴は疑問に思った。

美琴「明日菜、なんで赤くなっているの？」

明日菜「な、なんでもない！！！！」

カモ「むふふー、姐さんがこうなってるわけはな、仮契約の方法に理由があるんだよ」

ネギ「ちょ、カモ君！？」

カモ「仮契約の方法、ソレはだな……ずばり魔法陣の中でキスすることだ！！！」

上条&美琴「キス？　ＫＩＳＳ？　……キス――――！！！？？？」

カモ「いや、何もそんなにビックリしなくても」

閑話休題てか、収拾がつかなくなりそうなのでカモは自分の聞きたいことを聞こうとする。

カモ「で、お二人さんはどういう関係だい？」

美琴「ど、どういう関係って？」
カモ「ぶっちゃけ恋人同士かって事だよ」
上条「そそそそそそそそそそそそそそそそそそそ言うわけではないんだが！？」
美琴「そ、そ、そうよ！！　私とコイツは別に……そういう関係じゃ………」
カモ（ええー、コレで付き合ってないのかよこの二人……しかもお互いにお互いの好意に気がついていないとか……仮契約させてボーナス貰おうとか思ったけど……本気で応援したほうがいいかも知れねえなこりゃ。上条の兄さんはネギの兄貴と同じでフラグ体質みたいだけど一途なタイプでもあるだろうしな……どうしたもんか）
明日菜（うーん、もう一押し足りないわね……さてどうしたもんか）
ネギ（なんで動揺しているんだろう？）

三者三様の反応を示したが、カモと明日菜はお互いに合いコンタクトを取り始める。

明日菜（カモ、あんた何か企んでない？）
カモ（最初はこの二人にパクティオーさせて仲介料貰おうかと思ったけど……なんか、ほうっておくとフラグを立てまくって大変なことになりそうな予感がするんで本気で応援したくなっちまった）
明日菜（大変なこと？）
カモ（３－Aのほとんどにフラグ立てそうな予感がしてな、エヴァンジェリンにまでフラグ立てそうで怖いんだよ。そうなったら手がつけられねえ、ていうかこっちにまで被害が回ってきそうなんだよ）
明日菜（そんなこと……ありそうだから怖いわ。なんか、１万人以上のフラグを立てた気がするし）
カモ（さっそくパクティオーさせるか？）
明日菜（まって、上条さんって有害無害関係なく魔法を打ち消しちゃうから仮契約出来ないんじゃ？）

カモ（そこは大丈夫でさ、ネギの兄貴に頼まれてあるものを買っておいたから）
明日菜（あるもの？）

カモはどこからか、黒い手袋を取り出した。

カモ「上条の兄さん、ネギの兄貴に頼まれてたものを渡しとくぜ」
上条「（そもそも、御坂と俺の関係は……友達？　ライバルは……ちがうよな……）ん、なんだ？」
カモ「（まだ動揺してたのかよ）兄さんの力を封じるためにひつようなものでさ」
上条「でも、俺の右手は異能の力を宿した道具も壊すぞ」
カモ「その点は心配ねえ、そいつは特殊な植物が編みこまれた一品で、その植物は辺りの魔力を引き寄せる性質がある。兄さんの右手は一部の例外を除き一度に一種類を強弱問わず相殺するらしいから、そいつをつけていればある程度緩和されるはずだ」
上条「そんなにうまくいくのか？」
カモ「まあ、大丈夫だろうぜ、そいつは元々、魔法使い見習いが補助として使うタイプの道具で、それ自体に異能の力は関わっていないからな。あくまで、魔力を引き寄せる植物の力だ」
上条「まあ、つけてみるけど……たしかに壊れないな。で、なんでコレをつけさせたんだ？」
カモ「（さて、どうしたもんか……美琴嬢ちゃんは典型的なツンデレみたいだからな……一度デレればあとは簡単だな）うーん、とりあえず不幸が軽減されるかどうかを見てみた……い」
上条「それはほんとうでせうか！！！」

上条の目が光っている。なんかもう太陽のように。
不幸が弱まると聞いてテンションが一気に上がったようだ。カモは、その様子を見てある仮説を立てる。

カモ（そうか、鈍感なのは不幸だからモテるわけが無いっていう先入観のせいか。あとは、不幸に巻き込みたくないってところか？なんか、兄貴に熱血属性をたした感じの人だな……とりあえず、明日菜の姐さんに手伝ってもらうか）

カモは明日菜と小声で作戦（悪巧み）を立て始めた。なんか、怖い顔で。

明日菜&カモ（（おもしろくなってきたー））

明日菜はネギをめぐる女の戦いには興味を示さなかったが、年の近いものの恋バナなら興味があるようだった。もしくは、最近たまっていた非日常に対するストレスが爆発したのか。

その後、明日菜たちは自分の部屋に帰っていき、二人は夕食を食べ始めた。

美琴（……頑張って作ったんだけど……おいしいって言ってくれないかな？）
上条「……御坂」
美琴「ひゃ、ひゃい！？」
上条「なんだその返事は？」
美琴「何でもない！　それよりなんかよう？」
上条「いや、ただ……御坂の料理うまいなって……」
美琴「！？！？！？！？！？」
上条「どうかしたか？」
美琴「ふ、ふふふふにゃー」

上条「久しぶりの漏電ですか――！？」

美琴が目を覚ますと、目の前に上条の顔があった。

美琴「！？」
上条「お、目が覚めたか」
美琴「ななな、なんでひ、膝枕なんか……！？」
上条「いや、お前が漏電して気絶したんだけど……離してくれなかったから仕方が無く」
美琴「な……あんたのせいよ！！」
上条「何でだよ！？」
美琴「う、うるさい！」
上条「はぁ、洗い物してくるからそこで待ってろ」
美琴「あ……」
上条（その名残惜しそうな声と表情はナンデスかー！？）

その頃、明日菜と木乃香（＋ネギ＆カモ）の部屋では

カモ「決行は四月二十日、日曜日だぬかるんじゃないぞ姐さん」
明日菜「アンタこそ余計な真似をすんじゃないわよ」
カモ「分かってるての……必ず、前日までには約束を取り付けるんだぜ」
明日菜「当たり前じゃいの。女の子には準備が必要なのよ、色々とね」
二人「「ふっふっふ、急接近！　デート大作戦開始だ（ね）」」

実は、その裏でもう一つ別の計画が進行していることを二人はまだ知らない。

そして、再び場面は戻り上条宅

美琴（よく考えたら、明日菜ってネギ先生とキスしたってことよね）

今頃になって気がつく美琴であった。

上条「御坂ー」

美琴（うーん、でも姉弟って感じがしたし、気にしないほうがいいのかしら？）

上条「御坂どうした？　熱でもあるのか？」

そう言って、美琴のおでこに手を当てる上条

美琴「え？　……ひゃあああああ！！？？」

上条「そうか、そんなに俺のに触られるのが嫌だったのか」

美琴「い、いや、ビックリしただけよ」

上条「ならいいんだが。まあ、夜も遅いしおやすみ御坂」

美琴「う、おやすみ」

上条「（また入ってくるつもりじゃないよな？）」

上条は何かが動く音で目を覚ました。

上条「（うーん、やっぱり心細いのかねー、御坂だけでも、もとい

た世界に帰す方法を見つけなきゃな）」

少女にとっては少年と離れ離れになるほうがつらいのだが……鈍感な少年は気がつかなかった。

美琴「ねえ、起きてる？」
上条「ああ、起きているけど」
美琴「……ちょっと、失礼するわね」
上条「！？　御坂さん、一体何を……！？！？」
美琴「私ね、アンタがどこか遠くに行っちゃって二度と会えなくなるんじゃないかって不安だった。でも、今はこうしてあんたと一緒にいられる。私はそれだけで凄い幸せなの」
上条「え？」
美琴「……私には、アンタさえいてくれたら、それでいいから……すーすー」
上条「……」

「御坂、オレは……」

第3話　カモとパクティオーとキス！？（後書き）

妙な引きで終わらせてしまいました。だが、後悔はしていない！
次回は上琴デート作戦と明日菜の誕生日の話です。
ここではあまりにも過激な恋愛描写はしないつもりさ。（最大でもキスか添い寝だよ）過激になりそうだったらＲ１５つけようと思います。
次々回から修学旅行編スタート
修学旅行編の前にキャラプロフィールを入れるかも。

第４話　とある二人の心の内（前書き）

ちょっと、シリアスになるかもです。
ちなみに、頭の中のアイデアを即興で書くことが多いのであしからず。
あ、ちなみに上条さんのフラグ体質は消えませんよ遺伝ですし。
美琴ちゃんがやきもちしている描写を書きたいですし。
カモの口調が難しい。
明日菜の性格が少し違う気がしますが、他人の恋バナには積極的に反応しそうですし（ネギの場合は子供だから興味が無かったんだと思っています）、やっぱり３－Ａの女子のほとんどはこの手の話題が好きそうだと思うんで。

第４話　とある二人の心の内

４月２０日……とある理由により上条当麻と御坂美琴はデートすることになった。
それにより、二人は街を歩いているのだが……

上条「……」
美琴「…………」

無言だった。

明日菜「上条さんも上条さんだけど……美琴ちゃんももっと積極的に行かないと」
カモ「でもよ、デートだって自覚がある分マシだと思うぜ。二人の性格的に」
明日菜「まあ、それはそうなんだけど」
現在、二人のデートを尾行する一人と一匹。進展しない二人を見てやきもきしているのだった。
明日菜「せっかくお膳立てしてあげたのに……」
カモ「せめて、お互いの好意に気がついて欲しいもんだな」

とりあえず、時間をさかのぼりこの状況になった理由を説明しよう。

○○○

上条「ななな、なんですとー！！？？」
カモ「だからよー、いい加減素直になりなって事だよ」

４月１９日、上条はカモからある事実を指摘されてしまった。

カモ「先に言っておくがオコジョ妖精には人の好意を図るスーパーアビリティがあるんだぜ！」

ちなみにこの能力、わりと正確である。しかも、各種パラメータつきで表示可能。おまけに、幻想殺しは封じられているため、防御不能。（まあ、幻想殺しがあってもナゼか防御は出来ないだろうが）

カモ「パラメーターをみると友が８に親が２恋が１４に愛が１６に……色が１５の合計５５だぜ！！！！！」
上条「いいい、色ってなんだー！！！？？？」
カモ「色っていったらエロパワーよ」
上条「断じて認めません！　上条さんは紳士ですことよ！！　それに御坂は中学生だ、そんな邪な感情なんて……」
カモ「中学生だからって自分に言い聞かせる時点で認めているようなもんだぞ」
上条「グハッ！？」
カモ「それに、３－Ａの女子なんてショタコンが多いぞ。それに比べたら兄さん達の年齢差はすくないと思うんだが」
上条「い、いやでも……」
カモ「とにかく、男ならちゃんとデートに誘ってやんなさいな」

そう言いながら、口に何かをくわえるカモだった。

その頃、美事は明日菜に詰め寄られていた。話の流れは先ほどの二人と同じく、

明日菜「えっと……友が8で親が2、恋が……20！？　愛も20！？　色も20って……で合計が70！！！？？？　いやー、ピッタリって凄いわね……ていうか最高値が三つも」
美琴「ていうかそれなんなの明日菜！！」
明日菜「カモが言っていたんだけど、オコジョ妖精は人の好意を図れるらしいわよ。で、美琴ちゃんの上条さんに対するパラメーターを貰ってきたんだけど――」
美琴「ふふふふふふふふ――――」
明日菜「え、どうしたのみこ……」
美琴「ふにゃ――――」
明日菜「きゃあああああ！！！？？？」

一段と激しい漏電をした美琴であった。

美琴「うう、ごめんなさい」
明日菜「大丈夫だいじょうぶ、こんなの平気よ。わたしって体頑丈だし」

むしろ、なんで平気なのか気になるんだけど。と美琴は思う。

明日菜「美琴ちゃんも素直にならないと上条さんとられるかもよ」
美琴「嫌！！　それだけは絶対嫌！！！！」
明日菜「（う、何なのこの可愛さは……！？」

同棲なのに、思わずときめいてしまった明日菜であった。

その後、上条宅での出来事。

上条「あ、あのさ……み、御坂明日ヒマか？」
美琴「え、ひひひヒマだけどそれが！！！」
上条「えと、せっかくだから買い物に行ってみようぜおやすみ！！！！」
美琴「え、え、え、それって………ふ、ふにゃぁぁぁ！！」
奇声を上げて自分のベッドに飛び込む美琴。そしてその声を聞いた上条の反応は。

上条（なんですかその可愛い声は！！！！？？？？）

壊れていた。

○○○

そして、現在に戻る。

明日菜「歯がゆいわね」
カモ「そうだなー」

上条（き、気まずい……）
美琴（どうしよう、せっかくのデートなのに……手ぐらいはつなぎたいな……」
後半、声に出ていたが美琴はそれに気がつかない。だが、上条には当然それが聞こえた。

上条「そうだ、離れるといけないからな、手をつないでいくか（な、なんですとー！？　落ち着け素数だ、素数を数えるんだ……）」
美琴「うん！！（にゃにゃにゃにゃにゃんですとー！！！！？？？？）」

二人とも、心の中ではパニックになっているが、表面上ではしっかりとカップルのようになっている。

明日菜「あれってどういうこと？」
カモ「おそらく、脳が余計なことを考えられなくなって本音が出てきているんだな」

一方、その頃ネギは。

ネギ「似合っていますよ、このかさん」
木乃香「ちゃうやろネギ君」
ネギ君「あはは、そうでしたね」

何故か、デートのようなことをしていた。この二人の行動についてはまた後ほど。ちなみに、こちらも尾行されていた。

柿崎「あれって」
釘宮「もしかして」
桜子「デート！！？？」

麻帆良チアリーディングの三人娘だった。
柿崎「とにかくネギ君の保護者役の明日菜に連絡を！！」

そして、場面は戻る。

明日菜「ん？　携帯がなっているわね」
カチャ
明日菜「もしもし」
柿崎『もしもし、ちょっと大ニュースなんだけど！！』
明日菜「いま、忙しいの後にしてくれる」
柿崎『とにかく写真見てよ』
明日菜「もう、……木乃香とネギね……で、コレがどうかしたの？」
柿崎『え、だってデートだよ！！？？』
明日菜「えー、ただ姉弟で出かけているようなもんでしょ、だったらこっちのほうが明らかにデートしているわよ」
柿崎『え？　明日菜デートしてるの？』
明日菜「私じゃなくて美琴ちゃんよ」
柿崎『転校生の美琴ちゃん！？　まさか噂の彼氏！！！？？？』
明日菜「まだ付き合ってはいないみたいだけど……時間の問題ね」
柿崎『明日菜今どこ！？　私達もデレた美琴ちゃんが見たい！！！！！』

実は３－Ａクラスメイトの中では美琴がツンデレであることは共通認識です。

明日菜「まあいいけど……邪魔だけは絶対だめだからね」

柿崎『了解！！』

１０分後

柿崎「ぜぇ、ぜぇ……ダッシュできたわ」
明日菜「意外と早かったわね」
釘宮「で、下手人は」
明日菜「いつの時代の人よ」

上条「で、どこに行こうか……」
美琴「そうね……」

明日菜「さっきからあんな調子なのよね……何とかしたいんだけどね」
柿崎「ふむ、顔はまあまあね……中身のほうはどうなの？」
明日菜「美琴ちゃんはむしろ中身に惚れたみたいよ（詳しくは教えてくれなかったけど命を懸けて誰かを助けるような人だから内面はいいんだろうけど）」
釘宮「うーん、でもあれでカップルじゃないって本気なの？」
桜子「だよねー」
明日菜「たしかに周りから見ればカップルなのに……しかも、お互いがお互いの好意に気がついていないのが問題なのよね。上条さん……あの男の人のことなんだけど、なんか少しずつ気がついているみたいだから時間の問題だと思うけど……ネギと同じくらい鈍感みたいなのよね」
柿崎「それは……」
釘宮「また……」

桜子「どうして……」
釘宮「美琴ちゃんも結構鈍感みたいだしね」
柿崎「まって、進展あるみたいよ！！」
全員「「「何！！！？？？」」」
カモ（いきなり喋れなくなってつらいぜ）

上条「（インデックスに謝ったときよりも勇気がいるが……ええい！！　迷っていてどうする上条当麻！！）御坂、ちょっと行きたいところがあるんだがいいか？」
美琴「え、ええいいわよ！！？？」
上条「そうか、じゃあついてきてくれ」

明日菜「動き始めた」
柿崎「追うわよ」

二人は夕日がきれいに見える公園にいた。実は数十分前ネギと木乃香がここにいたのだが、奇跡的に入れ違いになったようだ。あの手袋のおかげなのだろうか。それとも必然なのか。

上条「御坂、今日はお前に言いたいことがあったんだ」
美琴「う、うん」
上条「一度だけしかいわねえぞ」

この一日、上条は考えた。この少女が自分にとってどのような存在か。一体、自分の中でどのような関係なのか。いや、どのような関係であって欲しいのか。
最初は良く分からなかった。なぜ、助けようとしたのか。彼女だけは魔術に関係しないところで人を助けようとした時は大抵彼女と関係したことだった。罰ゲームの時はどう思っていたのか、アックアとの戦いの時は、ロシアでは？　だが、それは些細なことだ。今、彼の中にはそれら関係なく大きな感情があった。
だから、自分の答えを、今、出そうとしていた。

「美琴、オレと結婚を前提に付き合ってくれ」

「うん！！」

そして、二つの影は重なった。

柿崎「ま、まさかの直球！？　しかもなんて甘いシーンなの！！？？」
釘宮「なんか、砂糖はきそうなんだけど」
桜子「甘いよ～」
カモ（さすがのオレっちも予想外だぜ）
明日菜「……よかったね美琴ちゃん」

美琴「えへへへへー当麻ー大好きー」
上条（まさか、ここまでデレるとは思わなかったけど……かわいいからいいか）

上条宅ではバカップルとなっていた二人がいた。

4月21日

木乃香&ネギ「明日菜（さん）誕生日おめでとう（ございます）！！！」
明日菜「ありがとう！」

昨日、ネギと木乃香は明日菜の誕生日プレゼントを選んでいたのだった。

明日菜（神崎たちが言っていたデートって私の誕生日プレゼント選びだったんだ）

カモ「まあ、万事うまくいってよかったな……だけど、修学旅行でいじられる二人が目に浮かぶな……まあ、どうにかなるか」

カモは無責任な発言を残していた。そして、明日からは待ちに待った修学旅行である。

第４話　とある二人の心の内（後書き）

今回は若干の改変がありました。
次回から修学旅行編へ突入。
ちなみに、大きな改変はありませんが、細かいところで変更点があります。
結構急展開でしたがご了承ください。二人とも、今まで気を張っていた反動で感情が爆発したものとさせてください。

第5話　人の恋バナは面白い（前書き）

主人公は誰になるんだろうなコレ。
一応、上条さんとネギで行こうかと思っていたけど、上条と美琴にしたほうがいい気がするな。

今回から修学旅行編開始です。
ちなみに美琴は出席番号３２番ってことになっています。
一応原作にはそっていきますが、一部改変が出るのであしからず。
今回から読みにくいキャラはひらがなかカタカナもしくはあだ名でいきます（シリアスなシーンは戻すことがあるよ）

第5話　人の恋バナは面白い

修学旅行、修学とは名を借りただけのお遊び行事のことである。

ネギ「では1班から6班までの班長さんは点呼をとってくださーい！」

３－Ａ修学旅行ＩＮ京都。

１班　鳴滝姉妹、チア娘トリオの五人。
２班　クーフェイ、超、ハカセ、楓、四葉、春日の６人
３班　委員長、朝倉、ちず姉、村上、長谷川の５人
４班　大河内、龍宮、和泉、明石、まき絵の５人
５班　宮崎、早乙女、夕映、このか、アスナそして美琴の６人

ネギ「あと一つの班は……」
？？？「先生」
ネギ「あ、桜咲刹那さん、６班は全員いますか？」
刹那「それが、エヴァンジェリンさんほか2名が欠席なので、６班が私とザジさんだけになりました。どうすればいいでしょうか？」
ネギ「（エヴァンジェリンさんはやっぱり来られないのか）分かりました、ザジさんは委員長さんの班に、桜咲さんは……アスナさん頼めますか？」
アスナ「別にいいわよー」
委員長「わかりましたわネギ先生」
美琴（委員長の喋り方って何かを髣髴とさせるような……なんだっけ？）
刹那「では、よろしく願いします」

このか「あ……せっちゃん、いっしょの班やなあ」
刹那「あ……」
何かを話したがりそうだったが、頭を下げただけでどこかへいってしまった桜咲。ネギは、少し不審に思ったが、特に気に留めなかった。

一方その頃、上条は。
上条「うーん、暇だ……」
一般客にまぎれていた。

上条「でも顔出すなって美琴にいわれてるしなー」
カモ「しかたがねえっすよ、付き合い始めたことが3－Aの嬢ちゃんたちにバレたときは凄かったぜー、やっぱ人の恋バナは面白いんかねー？」
上条「うーん、男にはよくわからん」

上条では魔力を探知できないため、カモがいっしょにいる。ちなみに、右手で触れてもカモは消えないようだ（命は破壊できないのと、カモ自体は現実世界の存在のためと思われる）

カモ「そういえば上条の兄さんは、なんか慣れてる雰囲気だなー」
上条「まあ、クーデター中のロンドンや戦争中のロシアの中を潜り抜けたことに比べたらな」
カモ「さらっといってっけど、この世界の中でもそんな経験つんでる奴はあんまりいないと思うんだが……」

カモにとっては正直、想像できないレベルの話だった。

カモ「そういえば、美琴の嬢ちゃんは電磁波レーダーを能力で使えるらしいが……」
上条「まあ、新幹線の中では使えないだろうな」
カモ「だよなー、オレっちの探知にも限界があるし……」
上条「目的が、ネギ先生の親書なら仕掛けやすい場所、逃げ場が無くて、人質をとりやすい車内で仕掛けてくると思うんだけど……」
カモ「どうしたもんかねえー」

場面は戻り、美琴たちはというと。

早乙女「で、美琴ちゃんはどこまでやったの？」
のどか「それは、私も気になります」
朝倉「で、実際どうなの？」
美琴「あうあうあうあうあう」

尋問されていた。

美琴「どうなのって……その……」
早乙女「キスはしたの？」
美琴「！？！？！？」

一気に顔が赤くなり、湯気が立ち上り始めた。

ハカセ「こんな時は、私が作った嘘発見器が」
早乙女「いやいや、それよりも……」
柿崎「ああ、キスはしていたわよ」
３－Ａ『！！！！？？？？？』

桜子「ばっちり見ちゃ今したー」
美琴「（ボンッ）」

このか「あはははは、なんかすごいことになっとるなー」
アスナ（ごめんね、美琴ちゃん）

ネギ「……（このまま、何事も無いといいんだけど）」

「キャアーーーー」

ネギ「！？」
アスナ「！？」

上条「！？」
カモ「！？」
上条「今のって」
カモ「仕掛けてきやがったみたいだぜ」
上条「とにかく行ってみよう」

ネギ「カエルの大量発生！？　（かすかに魔力を感じる）」
アスナ「とりあえず、はやく回収しないと」
まき絵「しずな先生が失神しちゃったよーっ」
ネギ「保険委員はしずな先生の開放を、いいんちょさんは点呼を」
アスナ「保険委員も失神しちゃったー！？　もう、私が代わりにやってやるー！！」
美琴「（もしかしたら、陽動かも……ネギ先生、親書は）」
ネギ「（あ……あれ？）」
美琴「まさか！？」
ネギ「ああ、下のポケットでした」

美琴「よかったー」

ヒュンッ

ネギ＆美琴「「！？」」

いつの間にかツバメが親書を銜えており、持ち去ってしまった。

ネギ「お、追いかけないと！！」
アスナ「あ、二人とも待って！！！」
委員長「あら、桜咲さんがいませんわ」
アスナ「え？」

上条「ってことは桜咲さんは味方でいいんだな」
刹那「はい」
カモ「信用しきれねえが……」
刹那「！？　どうやらネギ先生が親書を奪われたようですね」
上条「なに！？」

上条たちがいるほうへツバメが飛んできた。

カモ「アレは式神だな」
上条「そっれて紙で作ったあの？」
カモ「おうよ、差し詰め、ペーパーゴーレムだな」
刹那「では、私がやります」

ネギ「しかたがない、ラステル・マスキうわっ！？」
売り子「ああ、すみません！！！」

ネギは、魔法で打ち落とそうとしたが、売り子の女性にぶつかり呪文を唱えられなかった。

美琴「なら私の電撃で……ん？」

美琴の前方に上条たちが見え、一瞬動きが止まった。

刹那「……」
キンッ！！！

一瞬で式神を切り裂き、式はただの紙にもっどた。

刹那「……ネギ先生、これ落し物です」
ネギ「桜咲さん……？」
刹那「先生、気をつけたほうがいいですね、特に向こうについてからは」

美琴「で、なんでアンタは桜咲さんといっしょにいたわけ？」
上条「ビクッ！！？？」
美琴「うふふふふふ」
上条「いや、あのー美琴さん？」
美琴「この浮気者が――――！！！！！」
上条「ちょ、誤解だって……なんですかその電撃は！？」
美琴「これが私の全力だ――――――――！！！！！！！！！」
上条「不幸だ――――――――――――――――！！！！！！！？？？？？？？」

第5話　人の恋バナは面白い（後書き）

とりあえず、区切りのいいところで終わらしていくので長さがばらばらになります。
上条と刹那の会話については次回で。

第6話　刀は大切な人のために（前書き）

前回、上条と桜咲がお互いの目的について知っているので話が進むスピードが速いです。コメディパートになるまでが長い……

第６話　刀は大切な人のために

美琴「で、どういうことか説明してもらおうかしら」

現在、上条、美琴、ネギ、アスナ、カモは清水寺で生徒達からは見えない場所にいる。

上条「どういうことかといわれましても……」

カモ「まあ、それはオレっちから説明させてもらうぜ。兄貴たちにも関係することだしよ」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

カエルが大量発生する少し前のこと。

刹那「上条当麻さんですね」

上条「ん？　どちらさまで？」

刹那「私は桜咲刹那。近衛木乃香お嬢様の護衛です」

カモ「このか嬢ちゃんの？」

刹那「はい」

上条は、刹那から神鳴流や、木乃香の膨大な魔力のこと、身の上、今回の修学旅行で木乃香が狙われるかもしれないことを伝えた。

上条「桜咲さんの話は分かったけど……なんでそれを俺に？」

刹那「上条さんは魔法使いに対して絶大な効果を持つ能力を持ち、それなりに戦闘経験があると学園長に聞きましたので、あと、そち

らの目的もしっかりと把握しておきたいですし」
上条「利害が一致するから協力したいって所か？」
刹那「まあ、そんなところです」
上条「まあ、俺は親書を渡すネギ先生の護衛だけど」
カモ「オレっちたちの考えじゃそろそろ仕掛けてきそうなんだけどよ……」
上条「桜咲さんは何か変わったものを見なかったか？　たとえばルーンとか」
刹那「今回の相手は東洋系なのでルーンは使われないと思いますが……念のため調べておきましょう」

その後。いくつの質問でお互いにウソをついていないかどうか確かめた後、カエルの大量発生が起こった。

○○○

カモ「まあ、姐さんたちは木乃香嬢ちゃんのことも頭に入れといてくれ。オレと上条の兄さんは外側から調べる」
アスナ「じゃあ、私達は内側を見ていればいいのね」
カモ「そういうこった」
美琴「当麻……無茶しないでね」
上条「大丈夫ですよ、このぐらいなら上条さんは怪我一つしません」
美琴「約束よ」
上条「おう」

その後、上条とカモは３－Ａの生徒達から離れた場所で異変がないか見て回ることにした。

美琴「……」
アスナ「いやー、熱いわねー」
美琴「！？」
アスナ「ちょっとは人目を気にしたほうがいいと思うわよー」
美琴「ふにゃー」
ネギ「み、御坂さん！？」
アスナ「気絶しちゃったわね」

委員長「ネギ先生、よろしければいっしょに見て回りませんか？」
ネギ「そうですね、アスナさんたちも行きましょう」
アスナ「ほら、美琴ちゃん目を覚ましなさい」
美琴「はっ、ここは？」
アスナ「（さっきのことは言わないほうがいいかな）ほらー、向こうに恋占いの石があるわよ」
美琴「！！」
委員長「なんですってー！！！」
まき絵「なにー！！！！」
のどか「……！」

アスナ「なんか、増えてない？」

美琴「（でも、私と当麻は恋人同士だし……）お守りを先に買おうかな（当麻の分も）」

委員長「雪広あやか流恋の心眼術！！」

まき絵「え？　なにそれ！？」

のどか「（わ、わたしもネギせんせーと……）」

委員長は目をあけているんじゃないかと思うくらいのスピードで走る。そう、ショタコンだから！！！

ズボッ

いいんちょ「あっ」

まき絵「え？」

「「きゃー！？」」

ネギ「まさか、関西呪術協会の妨害！？」

いいんちょ「な、またカエルですのー！？」

ネギ「妨害……？」

のどか「……あ、ゴールです」

ゆえ「やりましたねのどか」

パル「おー」

いいんちょ「なんでこんなところに落とし穴が」

アスナ「罰が当たったんじゃない？」
まき絵「私が薄目あけてたからかな？」
いいんちょ「だからといってこんなことありえませんわよ！」
ネギ「うーん、上条さんたちに連絡したほうがいいかな？」

明石「おー、あっちも縁結びに効くらしいよ」
３－Ａ『なにー！！！』
長谷川「騒がしい奴らだな」

鳴滝姉「ぷはー、これうまい！」
鳴滝妹「おいしいですー」
いいんちょ「私とネギ先生の恋は必ず成就させますわ！！」
まき絵「なんか、効きそうだねこの水」
「いっぱいのめばいっぱい効くかもよー」
「わいわい」
「がやがや」

ゆえ「なんか、大変なことにって、皆さん酔いつぶれてますね」
ネギ「縁結びの水のところにお酒が流されていますね（やっぱり妨害？）」

新田「なんかお酒臭くないかね？」
ネギ「あ、甘酒です気にしないでさい！！」
アスナ「ちょっと、みんな疲れているみたいなんでバスに押し込んで来ます！！」
美琴「とりあえず、旅館に向かいましょう！」

刹那「……仕方ないな、外側は上条さんにまかせて私は内側に行くか」

美琴「あー、ひどい目にあった」
アスナ「そういや、今回はどんな厄介ごとなの？」
ネギ「関西呪術協会の長に親書を渡しにいくんですが、その妨害だと思います」
美琴「その、妨害しているのって？」
ネギ「関西呪術協会の一派だと思います。ただ、僕は東洋系の魔法には詳しくないので対策がとれなくて」
アスナ「桜咲さんに協力してもらえば？」
このか「アスナーいっしょにお風呂はいらへん？」
アスナ「あ、このか分かったわ行きましょう（私はとりあえずこのかといっしょに行くから後お願いね）」
ネギ「（分かりました、とりあえず桜咲さんと話してみます）」
このか「美琴ちゃんもいかへん？」
美琴「わたしはあとででいいわ」
このか「わかったえー」

美琴「桜咲さんの部屋は……」

「キャアアアアアア！！？？」

ネギ「今の悲鳴は！？」
美琴「このかさん！！？？」

このか「いやああん！？」

アスナ「なによこのおサル達は！？」

ちいさなおサル達がアスナたちの服を引っぺがせようとしており、
美琴は放心してしまった。
と、その時。

露天風呂の中から声が響いてきた。

刹那「このかお嬢様に何をするか――――！！！！！！！！」

怒りの桜咲刹那その人であった。

美琴＆アスナ「「桜咲さん！？」」

刹那「神鳴流奥義…百烈桜花斬！！」

このか「せ、せっちゃん？」
刹那「あ……いや……」
ダッ

このか「せっちゃん！！」

美琴（うーん、やっぱり複雑な事情があるのかしらね～？）

その後、アスナたちはこのかから、自分の幼少時の話を聞き、昔出合った始めての友達。桜咲刹那のことを話した。

このか「ウチ、なんか悪いことしたんかなあ、またせっちゃんとなかよーしたいわ……」

アスナ「このか……」
美琴「このかさん……」

ネギ「何とかしてあげたいですね」
アスナ「一番の親友だから助けてあげたいんだけど……」
美琴「なかなか難しい問題よね」
楓「お疲れでござるネギ先生」
ネギ「あ、楓さん」
美琴「（ござる……？）」
楓「（先生、なにか助けが必要ならば、拙者でよければいつでもよぶでござる）」
ネギ「あ、はい」
美琴「それにしても……（本当に中学生？　なによこの爆乳は」
楓「御坂殿、後半超えにでてるでござるよ」
美琴「……（やっぱり、胸か胸なのか！？」
楓「聞こえてござらんな」

刹那「ふうー、これでここは大丈夫だな」
ネギ「あ、桜咲さん何をやっているんですか？」
刹那「あ、ネギ先生。これは式神返しの結界です」
美琴「式神返し？」
刹那「先ほどのサルのような式神が入れなくなるようするためのものです」
アスナ「へー」
刹那「そういえば、御坂さんのことは聞いていますが、神楽坂さんも魔法のことは」
アスナ「とっくに巻き込まれているわよ」
刹那「そうですか」

ここで、刹那は今回の敵、関西呪術協会の一部勢力と陰陽道の呪符使いについての説明をしていた。
基本的に、西洋魔術師と似たようなもので、術者は後衛、式神を前衛とすることが特徴であること、自分と同じような神鳴流がついているかもしれないことなど。

刹那「以上です」
ネギ「じゃあ、やっぱり神鳴流はてきなんですか？」
刹那「はい……わたしはこのかお嬢様をお守りするために西から東についたいわば裏切り者です。でも、私の望みはこのかお嬢様を守ること、私はお嬢様をまもれればそれで満足です」
美琴「桜咲さん……」
アスナ「よーし、あんたがこのかの事を嫌っていないだけで十分よ。友達の友達は友達だからね、私も協力するわよ！」
刹那「か、神楽坂さん」
ネギ「当然、僕も協力します」
美琴「まあ、乗りかかった船だしね」
ネギ「よーし、じゃあ僕見回りに行ってきますねー！！」
アスナ「あ、こらネギ！！」
美琴「いっちゃったわね」
刹那「では、私達は守りにつきましょう」

ネギ「まずは上条さんと合流して」
ウィーン、ドンッ
？？？「きゃあ！？」
ネギ「あ、スイマセン！」
タッタッタッタッタ

？？？「うふふ、可愛い魔法使いね」

第6話　刀は大切な人のために（後書き）

なかなか上条さんに決め台詞を使わせる機会はなかったけど、次回ようやく使えそうです。あと、美琴は二人っきりじゃない時は呼び方いがいはいつもと同じような感じです。
いつになったら上条さんのパワーアップの話を書けることやら。
幻想殺しなどは独自の解釈が入っていますがご了承ください。

第7話　幻想を殺すもの（前書き）

ＰＶ１００００突破！　まだアカウントとってから一週間も経っていないよ！？
ユニークはまだ１０００か。

ちょっとシリアス目にいきます。
キャラ紹介は書けないかも。

上条さんのパワーアップ企画進行中。現在、二つほど決定しています。片鱗くらいは修学旅行編で出るけど、修行とかは修学旅行おわってからだろうな。

あと、ほかの小説でなにを書いて欲しいか活動報告で投票受付中。
投票が無ければ自分で書きたいの書くよ。当分こっちだけど。
４巻の後半がやっと始まる……

第7話　幻想を殺すもの

ネギが旅館を飛び出す少し前。

上条「なあ、カモ。桜咲さんって近衛の護衛なんだよな」
カモ「まあ、本人はそう言っていたぜ。てか、兄さんも直接聞いただろ」
上条「そうなんだけどさ、なんかふに落ちないって言うか」
カモ「？　どういうことでい」
上条「なんか、近づきたいのに近づきたくないって言うか……自分で言っててよくわかんねえ。やっぱ、アイツに近いものを感じるからかな」
カモ「アイツ？」
上条「俺の知り合いの女剣士なんだが……大事なものを守りたいのに自分からそれを遠ざけているっていうか、近衛と桜咲とはまた違ったケースなんだが、守りたいから遠ざけるってのが似てる気がして」
カモ「とりあえず、オレっちがいえることは一つだぜ」
上条「なんだ？」
カモ「ほかの女の話していると美琴嬢ちゃんに殺されるぞ」
上条「……ぜ、善処します」
カモ「なんか、それちがくね？」

ネギ「かみじょうさーん」
上条「ネギ先生！？」
カモ「兄貴、どうしたんでい？」
ネギ「僕も見回りしようかと思って」

上条「いくら先生って言っても、子供なんだから寝たほうがいいじゃないでせうか？」
ネギ「でも、自分に出来ることはやりたいんです」
上条「でもなー」
カモ「まあ、そう言うなって。ところで兄貴、カードの使い方をまだ教えていなかったな」
ネギ「カードってコレのこと？」

ネギが懐から取り出したのは、アスナとのパクティオーカード。

上条「そいつが仮契約の？」
カモ「おうよ、そいつにはいくつかの機能があってな……」

カモによると

1. パートナーとの念話
2. 遠くからの呼び出し（召喚）
3. パートナーの道具（武器など）や能力の発動

そのほかにもいくつか機能があるが、それはおいおい。

ネギ「へー、早速使ってみよう」
上条（今は手袋つけているからいいけど、触らないように注意しよう）
ネギ「えっと、額に当てて……『念話！』」
ネギ「（アスナさーん聞こえますかー？）」
……

ネギ「もしかして、向こうからは聞こえないのかな？」
カモ「そういえばそうだな」
上条「携帯のほうが便利なんじゃ？」
ネギ「そうでですね、アスナさんに電話してみます」
カモ「魔法使いが携帯……むなしいぜ」
上条「案外、そんなもんだぞ（魔術師達も携帯は使っていたしな）」

ネギ「あ、アスナさ「ネギごめん！！？　このかがさらわれちゃったー！！！！！！？？？？」なんですって！？」

カモ「兄貴！　アレは！？」

カモが見上げた先、謎の黒い影が近衛木乃香を持っていた。

？？？「あら、さっきはおーきに可愛い魔法使いさん」

なぜか、サルのきぐるみを着て。

ネギ「ま、待ちなさい！　ってなんですかこのお猿さんたちは～！？」
上条「お、触れば消えるみたいだな」
カモ「兄さんは冷静だな」
上条「とにかく追うぞ！」
カモ「おうよ！！」

ネギ「あ、まってくださーい！」
アスナ「ネギ――――！！」
刹那「ネギ先生！」
ネギ「あ、アスナさんに桜咲さんに御坂さん！」
刹那「こっちに「敵は上条さんが追っています。僕達もはやく！」

はい！！」

緊急事態のためか、いつもの子供としてのネギではなく、しっかりした性格が出てきているネギ。

ネギ「こっちです！」

上条「駅に逃げ込むつもりか！？」
美琴「追いついたー！！」
アスナ「急いでこのかを」
刹那「お嬢様を！！」
上条「いつの間に！？」
カモ「そんなことよりもはやくしないと！！」
刹那「おそらく、敵は呪符使いです。あのサルのきぐるみも、ただのきぐるみではありません気をつけてください！！」
アスナ「ねえ、人がいないのはどうして？」
上条「たぶん、人払いの術式だろ！」
美琴「うにゃ！？」
上条「どうした美琴！？」
美琴「なんか、いきなり放電した！？」
刹那「おそらく人払いに御坂さんの能力が反応したんだと思います」
美琴（そういえば、学園都市で似たようなことがあったけどそんときも人払いとかいうのが仕掛けられていたのかしら？）
カモ「って、いまはそんな場合じゃねえ。このか姉さんを助けねえと！！」
刹那「！？　お嬢様――――――！！！！！！！！！！！！！！」
上条「なんかキャラ変わってない？」
美琴「たぶん、あっちが素なんじゃ？」

???「しつこいでんなー、ほな二枚目使わせてもらいやす」
謎の女は札を小さなおサルに投げさせると呪文を唱え始めた。
???『お札さん　お札さん　ウチを逃がしておくれやす』
いきなり、大量の水が札から出てきて刹那たちをのみこんだ
刹那「!?」
アスナ「なによの水!?」
上条「オラッ!」
上条が右手を前に突き出すと、何かが割れるような音が響き、水が消えた。
???「何!?　魔法が無効化……いや、打ち消された?」
刹那「助かりました上条さん」
上条「そんなことより、早く行くぞ!!」
刹那（あの程度のことに瞬時に対応できないなんて……私は未熟者だ。私にはまだ力が足りないのか……お嬢様を守る力が……）

第7話　幻想を殺すもの（後書き）

ちなみに、記憶喪失になった時、上条さんは事件の顛末を大まかに聞いていますので、冒頭のセリフはそこから来ている言葉だと思ってください。

記憶があったらすぐ説教してたきがするんでコレでいいと思っていますが。

ちなみに、日本語でのみ呪文は書いてあります。

あ、短いですが一旦ここできります。

第8話　守るための力（前書き）

前回、事情によりいつもより短くなりました。
いまだに説教ができない上条さん。
刹那がネガティブになっているので展開が若干変化しています。

ちなみに、美琴はメダル常備。

第8話　守るための力

刹那（私では、お嬢様を守れないのか……っ）

刹那は唇を噛みしめていた。もっと冷静に対処できれば。気を緩めなければ。自分がしっかりしていいれば。
そんな考えばかりが頭の中を駆け巡っていた。

美琴「このサル女！！　いい加減にこのかさんを返しなさい！！！」

美琴は弱めのレールガンをこのかに当たらないように放った。

???「ぐっ！？　なんやこの力は！！？？」
アスナ「このかを」
上条「放せっ！！」

アスナと上条が謎の女に殴りかかるが、女はヒラリとかわした。

???「逃げるが勝ちや」
カモ「はやく追いかけるぞ！！」
???「絶対に、このかお嬢様は返しまへんで」
アスナ「このかお嬢様？」
美琴「ど、どういうこと？」
???「ほなさいならー」
アスナ「あ、待ちなさい！！」
美琴（雷撃の槍はこのかさんにもあたるし……どうすれば）
ネギ「桜咲さん、あの人このかお嬢様って……」

刹那「じ、実は関西呪術協会の一派に、極東一の魔力を持つお嬢様をまほらに送ってしまったことをよく思っていない一派があるんです。おそらく、その一派がこのかお嬢様の膨大な魔力を使用し、関西呪術協会を牛耳ろうとしているのではないかと」
美琴「それって……」
上条「用は兵器として使われるってことか……ふざけやがって！！」

上条と美琴には覚えがある。強大な力を持つものは人として見られなくなることを。二人はそんな人々を見てきた。そして、それが許せるはずも無かった。

美琴「だったらはやく助けに行きましょ……桜咲さん？」

いつのまにか、刹那は立ち止まってしまった。まるで、諦めたかのように。

アスナ「桜咲さん！？」
ネギ「ど、どうかしたんですか？」
刹那「ここから先は皆さんだけで行ってください」
美琴「な、なにを言っているのよ……？」
刹那「私はまた守れなかった……お嬢様を……このちゃんを……
…私には守る力が無いんです！！」

刹那は悔やんでいた。
幼いころおぼれたこのかを助けようとしたが、助けられなかったことがある。そのときにもっと強くなると。このかを守る力を手に入れると決めたことがあった。だが、また守れなかった……力が足りなかった。

刹那「私にはこのかお嬢様を守る資格なんて……」

「ふざけるな！！！！！」

刹那「！？」
上条「何が守れなかっただ、何が守る力が無いだ。そんなの関係ないだろ！　守る資格なんてものも最初から必要ねえんだよ！！　お前はどうしたいんだ桜咲刹那！！　自分が守りたいから、理由なんてそれで十分だろ！！！　まだ結果が出てないうちから諦めてんじゃねえ！！！！　近衛はまだ助かる。だったら諦めるな。お前がそれでも諦めるって言うなら……まずはその幻想をぶち殺す！！！！！」
刹那「わ、私は……（そうだ、何を迷う必要があったんだ。お嬢様を助けられないと決まったわけじゃない……なのに諦めてどうする桜咲刹那）」

「わたしは……この手で必ずお嬢様を守り抜いて見せます！！！！」

刹那（たとえ、お嬢様に拒絶されたとしても）

ネギ（父さんもこんな風に人を助けていたのかな……）
美琴（いつもこんな風にフラグを立ててるんだろうけど……これが当麻のいいところなのよね）
アスナ「って、はやく追いかけないと！！」

？？？「さすがにつかれたさかい、迎撃を……あら、どこに？」

刹那「うしろががら空きだ！！」
？？？「いつの間に！？」
ネギ『魔法の射手！！』
？？？「く、囮か！？」
上条「喰らえ！！」
？？？「何！？」
上条の右手がサルのきぐるみに触れ、サルは跡形も無く消えた。
？？？「く、打ち消された！？？」
女は距離をはなし、札を構えた。
？？？「くらいなはれ『三枚呪符　京都大文字焼き』」
「「「う、うわあああ」」」
バリーン！！！
上条「きかねえよ、そんな炎」
？？？「く、何なんやその右手は」
ネギ「今度はこちらからです。『契約執行１８０秒間　ネギの従者　神楽坂明日菜』！！」
アスナ「んっ……いくよ桜咲さん、美琴ちゃん」
「「はい！！」」
？？？（くつ、なんなんやあの光……西洋魔術師とそのパートナーの力なんか？　それよりも不可解なのはあの男と電気をまとっとる

あの女。魔力も気もかんじんのに変わった力をつこうて来る……）

ネギ「アスナさん、パートナーの専用アイテム（アーティファクト）を渡します！　アスナさんのは『ハマノツルギ』たぶん武器だと思います！！」

アスナ「ぶ、武器！？　だったらはやく渡して！！」

ネギ「はい！！　『能力発動　神楽坂明日菜　ハマノツルギ』！！」

アスナ「よーし、コレで私も……え？」

なんと、アスナの手に現れたのはデカイだけのただのハリセン。

アスナ「ちょっとどういうことよ！！？？」

ネギ「いや、僕に言われましても」

美琴「でも、見かけによらずに強かったりして……」

アスナ「ええーい、あたって砕けろ！！！」

？？？「あんさんの相手はこのこどすえ」

こんどはクマのきぐるみが現れた。

アスナ「邪魔！！」

アスナがハリセンでクマをはたくと、一瞬でクマは消えてしまった。

アスナ「あ、あれ？」

カモ（こ、この力は！？）

？？？「今度は送り返された！？」

刹那「お嬢様を返せ！！！」

？？？「しもた！？」

刹那が女に切りかかろうとしたそのとき、何者かが割って入った。

刹那「ぐっ……誰だ！？」
少女「どうも～神鳴流です～おはつに～」
刹那「え……お、お前が神鳴流？」
少女「はい～月詠いいます～」

まあ、刹那が驚くのも無理は無い。少女はフリフリの服を着ていたのだから。

月詠「見たところ神鳴流の先輩のようですね～」

二人は戦闘を開始したが、刹那からするとやりにくいことこの上ない。調子が狂う上、意外と強かった。
そして、小さなサル達を大量にアスナたちにぶつけ、時間稼ぎを始めた

???「このスキにウチは……」
ネギ『魔法の射手　戒めの風矢』
???「ま、マズイ！？」

女は咄嗟にこのかを盾にした。

ネギ「ま、曲がれ！！？」

そのせいで、ネギは魔法の軌道当たらないようにズラしてしまった。

???「あら？　なるほど～甘ちゃんのようやね～まったくこの娘はやくに立ちますな～この調子で利用させてもらいまいますわ」
アスナ「こ、このかをどうするつもりよ！！」
???「せやなーまずは呪薬と呪符で口きけんようにして、ウチら

の操り人形にするのがえーな」

ネギ「な……」

アスナ「何ですって……？」

美琴「あんた……」

上条「ギリッ……」

刹那（ブチッ）

？？？ウチの勝ちやな、ほななー決の青いガキども。オシリぺんぺん」

そう言って、このかを叩く女。だが、その行為が五人を怒らせてしまった。

アスナ＆刹那「「このか（お嬢様）になにすんのよー（なにをするつもりだー）！！！！！！！！！！！！！！」」

上条＆美琴「「ふざけるな！！！！！！！！！！！！！！」」

ネギ『風花！！　武装解除！！！！！』

？？？「！？」

女は一瞬で服が吹き飛び、

アスナ「フン！！」

上条「おりゃあ！！！！！」

？？？「あたっゲフッ！？」

防御貫通＆使用付加になり、

美琴「喰らえー！！！」

？？？「痺れるー！！！？？？？？？」

電撃を浴びせられ、

刹那「秘剣　百花繚乱！！！！」

？？？「ペポー！！！！！！！！？？？？？」

吹き飛んだ。

グシャッ、ドゴッ、ドサァァァァァ！！！

？？？「あ、あかん一時撤退や！」

月詠「あ、まってくだはい～」

？？？「おぼえてなはれー！！」

このか「……」

刹那「このかお嬢様……よかった」

このか「せっちゃん……？」

刹那「はい、もう大丈夫ですよお嬢様」

このか「よかった――――せっちゃん……ウチのこと嫌ってるわけやなかったんやな」

刹那「え……そりゃ私かて、このちゃんとはな……し……し、ししし」

このか「し？」

刹那「失礼いたしました！　わ、私はこのちゃ……お嬢様をお守り

できればそれだけで幸せ！　これからもひっそりとお守りさせていただきます！！！　御免！！！！！！！！」

そういうと、どこかへ走り去った刹那。

このか「あ、せっちゃん……」

「桜咲さーん！」

刹那「！？」

アスナ「明日、いっしょに奈良見て回ろうねー約束だよー！！！！」

刹那「あ……」

アスナ「大丈夫だよこのか、また仲良くできる日が来るよ。絶対に」

このか「……うん！！」

第8話　守るための力（後書き）

実は刹那に対する説教は最初から頭にありました。
結構やってみたかったんですけどいかがだったでしょうか？
刹那にフラグを立てる気はありません。彼女にはアノ属性が必要（笑）ですから。
とりあえず、キリがいいところで終わります。
次回修学旅行二日目。
活動報告の投票受付中！！

登場人物紹介　その１　ネタバレ注意　ヴァージョン２（前書き）

現在、グロッキー状態が続いているので、更新は少し遅くなります。
３連休があるんで大丈夫だと思いますが。
今回は、上条、御坂、ネギ、アスナのキャラ紹介です。
話が進むにつれ更新します。

登場人物紹介　その１　ネタバレ注意　ヴァージョン２

上条　当麻　（かみじょう　とうま）
男　１５歳

魔法使い相手のジョーカーその１
不幸な高校生。事件に巻き込まれることが非常に多く、そのつどギリギリのところで戦い抜いてきた。
事件を解決するたびに女性にフラグを立てる。フラグ体質の持ち主でもある。ちなみに遺伝性や、病気のごとく感染したりもするため、カミやん病とも呼ばれている。感染者は結構多く、恋人がいても消えることは無い。
少し、性格が変わってきたが説教をするキャラは健在。
近くに上条を超えるフラグメイカーのネギがいるのでカミやん病は発動しにくくなっている。

能力
幻想殺し（イマジンブレイカー）
あらゆる異能の力を相殺する右手。使い勝手がものすごく悪い。
異常な値を均一化するのには極端に働く、元々均一な値の異能の力（魂や地脈など）にはあまり力を発揮しない。
あくまで調和の取れた破壊をする。
上条が不幸といわれているのは、幸運を打ち消すからであるらしいが、本当かどうか疑わしい時もある。
天使などを殴った時は、元の世界に送り返すようだ。
現在、地脈や空気中の魔力を引き寄せる植物を編みこまれた手袋で、封じられている。
余談だが、うっかりで杖を壊されるかもしれないと思ったネギが用

意した。（本人には言っていないが）

御坂　美琴　（みさか　みこと）
女　１４歳

常盤台のエース、電撃姫などの異名を持つ、学園都市の頂点レベル５第三位の電撃使い（エレクトロマスター）
典型的なツンデレでもある。ただし、ツンには電撃を用いるため、洒落になっていない。
何故か、デレてしまったが後悔はしていない。
人前ではまだツンが出ている。嫉妬深い。
周りにお姉さまと呼ばれることが多いという、難儀な特性の持ち主。
本人は勘弁して欲しいみたいだが。
上条ほどではないがフラグ体質。
行動理念は上条に似ている。

能力
超電磁砲（レールガン）
単純に電気を操る能力。ただし、応用力が高い。超電磁砲は、応用の一つにして、象徴ともいえる技である。
・電撃の槍　体から電撃を出す。主に、髪や手から出す。
・砂鉄の剣　地面にある砂鉄を磁力で剣の形にする。チェンソーのようなこともできる。
・超電磁砲　指先のコインを弾く。その際、レールガンの仕組みを用いて飛ばすので、見た目は光の大砲。射程距離が短いのが欠点。
このほかにも色々あるが、条件が揃わないと使えなかったりするものが多いため、電撃の槍と超電磁砲以外はあまり使わない。

ネギ・スプリングフィールド
男　１０歳

一流大卒ぐらいに頭がいい赤毛の少年。
魔法世界の英雄、ナギ・スプリングフィールドを父に持つ。母親はかなりのネタバレ要素のため割合。
ネガティブになることが多い。父の背中を追いかけており、周りが見えなくなることもしばしば。
母親のことについて考えたことがあるかどうかは不明だが、現在は父の行方を捜している。
もっている杖は父の形見。父親は公式には死んでいるが、その記録のあとに出会っているため生きている可能性にかけて探している。
京都には父の家がある。
上条を超えるフラグメイカー。しかもより鈍感。キスされても気がつかないレベル。相手にもよるが好きと言われても気がつかない。
フラグ数は上条より少ないが、年齢、爆発的に増える性質など今後の展開でとてつもない数のフラグを立てるであろう人物。ある意味末恐ろしい。

魔法
・魔法の射手　　各属性の魔法弾を打ち出す。風、雷、光の三つを使用可能。使う際、属性、本数、性質も唱える。
・風花　武装解除　風属性の武装解除呪文。ネギがくしゃみした時も出てくることがあった。
・風精召喚　　風の中位精霊を使って形を作り戦わせる。あまり使用されない。

・風花　風塵乱舞　強風を出す。
・雷の暴風　電撃と風の力を持つ強力な呪文。上位呪文でもある。
・白き雷　白い電撃を出す。
その他多数。

神楽坂　明日菜
女　１５歳

魔法使い相手のジョーカーその２
バカレンジャーレッドの名を持つ中学生。ネギがまほら学園にやってきた日に魔法の存在を知ってしまう。
ある意味不幸な人物。
オッドアイなのだが、周りは特に何も言わない。本人も大して気にしていない。
色々と謎が多い人物でもあるが、本人は自覚なし。魔法と関わるようになってきてから、疑問に思い始める。
ネギの最初の仮契約者。
なぜか、恋バナが好きになっている。
あたまにベルをつけている。

能力
魔法無効化能力（マジックキャンセラー）
魔法や、気を無効化する能力。レア度が高い。
攻撃性のある魔法を無効化し、回復系などは受け付けるなど、幻想殺しよりも使い勝手はいい。
ただし、こちらは全てが無効化できるわけではないため、攻撃を喰

らうこともある。
超能力は無効化できないと思われる。

武器・アーティファクト
ハマノツルギ
魔法解除効果のある大剣。ただし、アスナの力量が無いからか、ハリセンの形になっている。
それでも、魔法使い相手のジョーカーであることには変わりない。

登場人物紹介　その１　ネタバレ注意　ヴァージョン２（後書き）

とりあえず、こんなもんかな。
ところで、活動報告に書いた禁書とバカテスのクロスの３番。
文月学園にインデックスが行くってやつ。
ここの外伝にしようかと思っていたりする。
とりあえず、こっちを書いていくけど、感想などの意見で本当にやるか決めようと思う。

早いところ学園祭まで書きたい。ていうか、コタローを早く出したい。
８巻のヘルマン戦はお気に入りの話の一つです。

第９話　宮崎のどかの勇気（前書き）

今回はラブコメメインの予定です。
相変わらず、即興で書いているので色々とアレな部分が多いですが。
さて、のどかちゃん大活躍の第９話のはじまりです。
今回はさらに短くなるかも。

第9話　宮崎のどかの勇気

修学旅行二日目。
本屋こと、宮崎のどかは……

のどか「あ、あのネギ先生……よろしければ、きき、今日の自由行動……私達と……一緒にまだ、まい、まふ……ま、回りませんでしょうかー？」

ネギ人形相手に何かの練習中だった。

のどか「あうー……」

ネギ「それではまほらの皆さん、いただきます」

「「「「「「いただきます」」」」」」

のどかが練習していた時より、少し時間はたち、ここは大食堂。

このか「せっちゃーん！！」
刹那「（ぴくっ）」
このか「いっしょに食べよー」

ガタッ、たったったった

このか「あ、はずかしがらんでもいいのにー」

とてとてとてとて

このか「まってーせっちゃーん」

刹那「こ、このちゃん！？　わ、わたしはべちゅに！？」

アスナ「なんか、桜咲さん雰囲気変わったわねー」

ネギ「そうですねー」

美琴（ていうか、色々とツッコむべき所があると思うんだけど……）

ネギ「うーん、まだ親書のこととかあるけど……今日はどうしようか……（たしか、今日は奈良を班別で回る日だよね）」

まき絵「ネギくーん！！　一緒にまわろー！！！！！」

いいんちょ「まき絵さん！！？　ネギ先生は私と回るんですわよ！！」

「あーわたしたちも回りたーい！！」

「そうよそうよ！！」

のどか（あ、あう……わたしもまわりたい……がんばらなきゃ）

のどか「あ、あの……ネギ先生！　良ければ私達と一緒に回りませんか！！！」

まわりの空気は一瞬固まる。それもそのはず。この少女、宮崎のどかはあまり喋らず、気弱な性格であり、大声を上げることがまずない。

ネギ（うーん、宮崎さんのいる5班はおサルの人が狙っているこのかさんがいるし、いざとなったら桜咲さんとアスナさんに御坂さん

がいるけど……宮崎さんたち三人を巻き込むわけにもいけないから
僕もついていったほうがいいかな？）

ネギ「そうですね、今日は5班と回る事にします！」

「「「「「「ええ～！？」」」」」」

まき絵＆いいんちょ「「ま、まけた……」」

ところ変わり、奈良の鹿を見に来た一行。ちなみに、上条さんはカモと一緒に遠くから一行を見守っています。

ネギ「鹿がたくさんいますよー！！」

ネギは年相応にはしゃいでおり、それを弟を見るような目で見守る一行。

のどか「えへへーネギ先生ー」
ただし、この人だけは違ったが。
のどか「えへへへへー」
周囲にハートマークが浮かんでいるのはご愛嬌。

パル「いやーのどかにあんな勇気があるとは」
ゆえ「感動したです」

のどかの親友二人も褒め称える。

パル「だけど、甘いわ」

のどか「え、どうしたの？」
パル「あんた、この程度で満足してんじゃないでしょうね」
のどか「ギクッ」
パル「この、バカチンが――――――！！！

さらにぶち壊しな人投入。

パル「アスナ、、美琴ちゃん大仏見に行くわよ！！」
このか「せっちゃーん！！　お団子一緒に食べよー！！！！」

一瞬のうちにさらわれてしまった三人。

ネギ「あ、あのー」

のどか「ね、ネギせんせー……」
ネギ「あ、宮崎さん。みんな行っちゃいましたし、二人で回りましょうか」
のどか「え、ハイよろこんで！！」

こうして、パルの策略と、このかの暴走により二人きりになった。

だがしかし、奥手なのどかは……

「わ私、だいす……大仏が好きで！！」

「わ、私……ネギ先生が、だい、大吉で！！」

そんな迷言や、はずいかしいポーズを大量に行ったり……正直見てられない光景であったが、ネギもかなり鈍感なため、普通は気付くものを、大丈夫かなー程度にとらえていた。

ちなみに、遠くからその様子を見ていた人が二人。

上条「なにやってんだあの人」
美琴（アンタも先生並みに鈍感よねー）
上条「なんか言ったか？」
美琴「別にー」

のどか「ごめんなさーい！！！！！」

美琴「はぁ……同情するわ」
鈍感な人に思いをよせている者同士、思うところがあるのだろう・
美琴「まあ、余計なことをしたら悪化するんだろうけど」
手が出せないのが歯がゆいようだった。

のどか「あうあうー、あ、アスナさんに桜咲さん？」
アスナ「本屋ちゃん、どうかしたの？」

相談してみようと思い、アスナたちに今日のいきさつを話すのどか。

アスナ「え、ネギに告白したの！？」
のどか「い、いえ……しようとしたんですが失敗しちゃって」
カモ（これは……）
いつのまにか、アスナの肩に乗っていたカモ。コイツの悪巧みは今後大変な喜劇を生む。その話は今ここで語られるべきではないが。
刹那「宮崎さんはどうしてネギ先生に？　私がいうのもあれですがまだ子供ですよ」
のどか「ネギ先生は、普段は子供っぽくてカワイイんですけど、時々、私達よりも年上のような、頼りがいのある大人びた顔をするん

です」
のどかの独白に、赤面するアスナたち。
のどか「たぶんですけど、それはネギ先生は私達にはない目標を持って前を目指して進んでいるからだと思います。本当は遠くから眺めているだけで十分。私は勇気をもらえたから。でも、今日は頑張って自分の思いを伝えてみようかと……」
アスナ「どうしたの宮崎さん？」
のどか「二人ともありがとうございます。なんだかスッキリしました。私、行って来ます」

ネギ「宮崎さーん、のどかさーん。おかしいな、どこに行ったんだろう？」

のどか「あ、あの……ネギ先生」

ネギ「あ、宮崎さんどこにいっていたんですか？」

のどか「あの……私、ネギ先生のことが」

アスナ「おおおおおお」
刹那「おおおおおお」
カモ「おおおおおおおおおおおおおお」
美琴「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
上条（何、この空気？）

パル「いけぇぇぇぇぇぇぇ！！！

上条「なんだ、このカオス」
ゆえ「ですね……そちらも大変そうで」
上条「まあな……はあ、不幸だ」

アスナたち一部始終を覗いていた面々とこのかはネギの介抱を始め、初対面のはずの上条とゆえはお互いのツレに対しての愚痴で意気投合するのだった。
これが後にまほらの隠れサークルと呼ばれることになる不幸同盟の誕生の瞬間でもあったが。

第9話　宮崎のどかの勇気（後書き）

そんなこんなで、第9話の終わりです。
ゆえが苦労人キャラになったけど気にしないでください。

不幸同盟はネタです。本当にやるかもしれませんが。
メンバー候補は千雨やタカネさん、村上あたりでしょうか。

第１０話　パパラッチ朝倉和美の陰謀（前書き）

やっと、４巻が終わる。
アンケートをとりたいこともあるので、
あとがきで募集します。

今回は暴走しまくりです。

第１０話　パパラッチ朝倉和美の陰謀

夕刻、旅館にて。

ネギ「？？？

しようどうしようどうしようどうし

いいんちょ「ネギ先生、どうされたんですの？」
まき絵「昼の奈良公園でなにかあったのネギ君」
訂正、破壊神たちであった。
ネギ「べ別に誰もなにもというか僕に告白した人なんて……」
自爆乙。
「「「「「「「なにいいい

いいんちょ「じつはですね……」
事情説明中
朝倉「って、誰かがネギ君に告白しただけっしょ」
いいんちょ「十分許される行為ではありませんわ！！！！！！！！」
朝倉（目が死んでいるんだけど……正直、怖い）
ショタコンに加えてヤンデレの気もあったいいんちょこと雪広あやかであった。
朝倉「まあ一応調べてみるよ（まあ、犯人はアイツ以外にイナイだろうけど）
朝倉は真っ直ぐに宮崎のどかのいる部屋に向かった。
朝倉「本屋、一つ聞きたいけどいいかな？」
のどか「いいですよ、なんですか？」
朝倉「アンタ、ネギ先生と結婚したって本当？」
のどか「ぶふうううううううううううううううう！！！！！！！！

朝倉「まあ、応援するからがんばんなよー」

朝倉「うーん、テープレコーダーに撮ったはいいけど、みんなが知ったら騒ぐだろうし……いいんちょが知ったら……考えないようにしよう」
そういいながら、テープレコーダーの消去を行う。
朝倉「まあ、頑張んなさいってことで……あれ、ネギ君？」

ネギ「はぁ……」
カモ「重症だな」
ネギ「うう……」
カモ「ん、兄貴アレ！？」
ネギ「あ、ネコが！？」

ネギの目の前では一匹の小さなネコが車に轢かれそうになっていた。

ネギ『ラス・テル・マ・スキル・マギステル』

ネギは始動キーを唱え、ネコを助けるために呪文をつぐむ。

『風花　風障壁』

車を上に吹き飛ばし、ネコを助けた。
ちなみ、車も無傷だ。運転手は気絶したが。

ネギ「ふうー」
カモ「兄貴、あんま派手な魔法は使わないほうがいいぜ」

ネギ「そうだねー、このネコどうしよっか」
カモ「とりあえず、上条の兄さんに預かってもらおうぜ」
ネギ「そうだね」

そう言って、杖にまたがり、空を飛ぶネギ。

だが、この一部始終を見ている人がいた。パパラッチ朝倉和美である。

朝倉「スクープキター！！！！！！！！！！」

かなりのハイテンションであった。

そのまま、トイレに駆け込み、思考を加速させる。

朝倉（超能力者……は違うだろうな。（むしろそれっぽいのは美琴ちゃんだし、あとで調べるか）宇宙から来た正義の味方（いや、それはない）。なら、人間界に修行のためにきた魔女っ子・男の子バージョン！！　状況証拠はコレが一番だね）

何故か、二重に思考を行う朝倉。

朝倉「そういや、それっぽい写真をいくつも撮っているんだよねー私」

どうして、今までできがつかなかったのだ？　ネギも失態が多すぎるのだが。

朝倉「しょうがない、アノ手を使うか」

朝倉が色々準備している頃ネギは。

ネギ「あ、上条さんお疲れ様です」

例の子猫を預けにいっていた。

上条「お、どうしたんだ？」

ネギ「実は……」

説明中。

美琴「へーそんなことがあったんだー」

ネギ「なんで御坂さんが見回りに？」

美琴「桜咲さんと交代したのよ」

上条「……ちょっと錯乱しかけていたしな」

美琴（桜咲さんって、黒子と同じニオイがするのよねーこのかさん大丈夫かしら？）

ネギ「どうしたんですか？」

美琴「なんでもないわよ」

上条「ところで、この子猫野良猫みたいだな」

ネギ「本当ですね。首輪がありません」

美琴「どうしようかしら……」

ネコ「にゃー」

美琴「え！？」

上条「なに！？」

ネギ「？　どうかしたんですか？」

上条たちが驚いたのは、美琴にネコが擦り寄ってきたからであるのだが、驚いている理由を知らないネギには不思議に思えるらしい。

上条「ああ、美琴は自分の能力の影響で体から常に電磁波が出ているんだけど、ネコとかの動物はその電磁波を嫌がって美琴には近づいてこないんだよ」

ネギ「そうだったんですか……でもあの子猫はなぜ？」

カモ「オレっちの推測だけどよ、京都とか奈良って魔力が集まりやすい場所だから、濃い魔力を浴びているうちに体制が出来たとか」

上条「そんなバカな」

カモ「でもよ、オレっちは別に平気だぜ」

上条「まあ、そういえばそうだな（そういや、御坂妹の飼っていたネコは懐いていたな。耐性ができる可能性もあるのかもな）」

美琴「アハハハハハハ～」

カモ「ところで、御坂の姉さんがトリップしているんだが」

上条「人一倍動物とか好きだったのに、触れなくなって苦労していたからなー」

カモ「うれしさのあまりに壊れちまったと」

上条「まあ、そういうことだ」

しばらくお待ちください

上条「美琴さん、もういいでしょうか？」

美琴「……さっきのは忘れて」

ネギ「あはははは……」

カモ「で、どうするんでい？」

美琴「ねえ当麻」

上条「？」

美琴「この子、飼っちゃダメかな？」

必殺上目遣い！！
美琴「ダメ？」
上条「う……まあ、ちゃんと世話できるなら」
美琴「やったー！！！！！！」
カモ「すっかりバカップルだな」

ネコを上条に預け、ネギ、カモ、美琴は旅館に戻っていった。
上条「ネコの名前考えないとなー……美琴のネーミングセンスに不安を感じるんだが……ネコ太とかつけそうだな」
ネコ「みー」
上条「なんかおとなしいなー……スフィンクスはもうちっと暴れたが……あ、コイツもしかしてメスか」
ネコ「みー」
上条「お、肯定ですか」
ネコ「みー」

何故か、ネコと会話していた上条であった。意思の疎通は出来ていたが。ちなみに、スフィンクスとは暴食シスターの飼っていたオスの三毛猫である。

所変わってネギの部屋。
ネギ「はあ、どうしようか」
コンコン。
ネギ「あ、はーいどなたですかー」

しずな先生「どうもー」
ネギ「どうかされました？」
しずな「いえ、ネギ先生の耳に入れたいことがありまして、少し外でお話しませんか？」

ちょっと、人目につきにくい場所。

ネギ「あのー？」
しずな「うふふふふ」
ネギ「何の御用で……」
しずな「私、あなたの秘密を知ってしまったもので」
ネギ「！？」
しずな「ネギ先生、あなた魔法使いでしょう」
ネギ「ど、どうしてそれを！？」
しずな「そんなことより魔法みせてくださいな」
ネギ「だ、だめですよー！！！！！？？？？？？　……あれ？　しずな先生お顔が剥がれかけてます？」

しずな？「くっ……急ごしらえだからミスったか」

ネギ「あ、あなたは誰ですか！？」

しずな？「あるときは美人教師。またあるときはとつげきリポーターそしてその正体は」

「３－Ａ　３番　朝倉和美その人よ！！」

ネギ「なっ！？」
朝倉「さあ、魔法を使って見せてよさあいますぐ！！」
ネギ「う、うえ……うえええええええええええええええええんんんんんん」
カモ「しまった、パンクしちまった！！？？」
ネギ「うわぁぁぁぁぁぁん！！！

うっかり手を滑らし風呂場に落ちた。

朝倉「メモリーまで……」

落ち込む朝倉。

カモ「いやいや、アンタ、キラリと光るもの持ってるよ」

朝倉「え？」

カモ「オレっちと手を組もうぜ」

今ここに、とんでもないコンビが結成されようとしていた。

転んでもただでは起きない。それは間違いないようだった。

第１０話　パパラッチ朝倉和美の陰謀（後書き）

それにしても、１０話やってやっと1冊終わるのか。
いいんちょにヤンデレ属性追加しちゃいました。

ネコの名前募集します。

第１１話　暗躍開始！！（前書き）

久々の更新です。
今回は短いと思いますがご了承ください。
スクナ戦までサクサク進めたいと思います。
仮面ライダーファングのほうもヨロシク。

第11話　暗躍開始！！

旅館のとある一室。

朝倉「フッフッフ」
カモ「ヘッヘッヘ」

なにやら黒い会話をしている二人組み（正確には一人と一匹）がいた。

カモ「で、計画のほうは」
朝倉「ばっちり伝えてあるよ」
カモ「そうか……」
朝倉「それより、ネギ先生のほうは大丈夫？」
カモ「問題ねえ。ネギの兄貴は安心しきっている」

ピンポーン

朝倉「おっと、時間みたいだよ」
カモ「それじゃあ、こっちも魔法陣のほうを起動させる」
朝倉「それじゃあ、抜かりなく」
カモ「おうよ、しっかり稼がせてもらうぜ」

「「笑いがとまらねえぜ」」

この数時間前、朝倉和美に魔法がばれたネギであったが、カモとの取引により魔法のことはばらさないと誓う。
ただし、取引についてはネギは知らない。
そして、その取引内容とは。

『ネギのくちびる争奪戦』

脱力する内容だが、朝倉、カモ双方に利益が出るのである。

まず、ルール説明をしよう。

1班から5班の中からそれぞれ代表を二人選ぶ。
鬼の新田とよばれる生徒指導の先生の目をかいくぐり、ネギのくちびるを奪ったもの（ようはキス）が勝者。
妨害は、枕を使った攻撃のみ。
上位入賞者（キスできたもの）には豪華景品あり。
ただし、鬼の新田に見つかると朝まで正座デス！！
※怪我等の責任を当局は一切負いません。

そして、参加者以外は食券トトカルチョに参加可能。
どの班がかつか予想してもらうのである。

そして、朝倉の利益はうまくいけば食券が儲かる。
カモに関してはだが、なんと旅館全体に仮契約の魔法陣が仕掛けてあるのだ！！

カモは仮契約一回につきボーナスが振り込まれるのだ。

それでは、班員の説明だ。

１班代表　鳴滝姉妹　通称チビ姉妹
２班代表　古と楓　通称武闘派コンビ
３班代表　いいんちょ＆長谷川千雨　通称ショタコンと巻き込まれた人
４班代表　明石裕菜と佐々木まき絵　通称運動部コンビ
５班代表　宮崎のどか＆綾瀬夕映　通称図書館の二人

ちなみに、３－Ａのストッパー役であるはずのいいんちょは例によって暴走しているため大変危険である。

そのころ、ネギは。

刹那から、身代わりの式神を受け取っており、身代わりのための札を作っていた。

ネギ「あ、また間違えちゃった」

札に自分の名前を書くのだが、何回か失敗しているようである。ここで千切ればいいものを、そのまま捨てたためこのあと悲劇（笑）が起こるのだがこのときはまだ、誰も知らない。

ネギ「やっと書けた」

ネギ『おふださんおふださん、僕の身代わりになってください』

そして、札はネギそっくりになった。

ネギ「わー凄いや」
偽ネギ「ネギです」
ネギ「それじゃあ、僕の変わりにここで寝ていてください」
偽ネギ「分かりました。ネギです」

ネギ「よーし、パトロール行くぞー！」

ネギはその時気がつかなかった。失敗した札を捨てたごみ箱が光っていたことなど。

そしてその頃の上条と美琴は。

上条「このネコの名前どうすっかー」
美琴「そうねー」

上条の部屋にてネコの名前を考え中だった。
ちなみに、学園長経由でネコを連れてきてもいい許可は貰っている。
ケージを上条が買いにいっており、不幸に巻き込まれていたが、いつものことなので割合。どうせ不良に巻き込まれていた人を助けただけだから。

上条「それにしても、なんか騒がしいな」

美琴「なんか、ネギ先生のくちびる争奪戦をやるらしいわよ」
上条「なんだよそれ」
美琴「さあ？」

美琴（くちびるかー、そういえば当麻とキスしたのってあの時の一回だけだったなー）

美琴「ねえ、当麻」
上条「なんだ？」
美琴「キス、したい？」
上条「な、ななな、何を言っているんですか美琴さん！？」
美琴「ねえ、どうなの？」
上条「いえ、したくないといえばウソになりますが……」
美琴「じゃあ、いいわね」
上条「えっ――んぐっ」

美琴はいきなり顔を近づけ、上条とキスをしていた。

そして、二人の近くにカードが浮いていた。

第１１話　暗躍開始！！（後書き）

前回、美琴が拾った子猫（メス）の名前を募集中です。
一応、自分でも考えているんですけど、動物を飼ったことがないんで、かってが分かりません。

トトカルチョとかはないですが、原作と若干違う流れにしようかなと思っています。アノ人には勝たせるつもりですが。

最後の仮契約はどっちのカードを出そうかな。
こっちも意見を出来ればお願いします。

夜のノリなんでアレですが後悔はしていない。
あと、初の予約掲載をします。

投票開始！！　ついでに3万ＰＶ突破記念だよ（前書き）

ちょっと決めかねているパクティオーカードとアーティファクト。
３万ＰＶ突破しているし、ここで企画やります。

※ちょろっと修正した項目があります。

追記　投票は締め切りました。

投票開始！！　ついでに3万ＰＶ突破記念だよ

とりあえず、投票でパクティオーの結果＆アーティファクトを決めます。
なお、ご意見がある場合も出来る限り受け付けます。
アーティファクトはほかの漫画などから持ってくることもありますが、チートは無しです。
アレンジも加える予定。
オリアイテムも考えてある。

・説明

投票は感想にて受け付けます。なお、票が入らない場合などは、独断と偏見と知り合いの意見などで決めます。
書き方は一番最後で説明します。

まず、上条か美琴、どっちが従者（パクティオーカードが出たほう）か。

1. 上条が従者
2. 美琴が従者
3. お互いが主従契約を行い、両方のカードが出る。

続いて、上条のアーティファクト（これらのアイテムは幻想殺しに

よる破壊は出来ない設定）

A．神の道化　言わずと知れたDグレのアレ。ちょっとアレンジはいります。効果はDグレを参考にする。左腕部分は魔法発動体として使用可能。退魔の剣は使用するか迷っている。当麻は「たいま」とも読むから似合うかなとは思ってる。

B．メダガブリュー　オーズのプトティラの武器。イマジンブレイカーに似合いそう。効果も幻想殺しと同種。メダルの変わりに魔力などを使用。

C．ドラゴンクロー　イメージはメイプルの海賊装備（グローブ）。身体強化、竜の力を一部使用可能。竜の力のイメージは滅竜魔法

D．幻想の手甲　オリアイテム。幻想殺しの出力を自在に調節できる。最大で竜王の顎を出すことが出来るが体力をかなり消耗する。形は一方通行の杖の楯状の部分に少しゴツイ手袋を足した感じ。色は黒。

美琴のアーティファクト案

a．夢幻のコイン　オリアイテム。自身の魔力や気でコインを作り出す袋。ランクの低いアイテム。

b．世界樹の髪留め　オリアイテム。自身の魔力や気で防護障壁を作り出す。美琴の電気でも可。

c．雷の姫弓　オリアイテム。手甲のようになっているが、甲の部分に小型の弓（バリスタ状）が取り付けられている。雷を矢の形にする武器。本来は雷の魔法を圧縮して放つためのもの。形は闇咲の持っていた梓弓に近い。色は白。

d．幻雷刀　モンハンフロンティアのキリンの剛種太刀。ついでにキリン装備の服装にする。ちなみに、時代設定から考えてモンハンはこの世界に無いと思う。上記の上条のアイテムにも該当。剣士は刹那やアスナがいるので、剛種弓も持たせようかなと思っています。

投票では、番号ー記号のような書き方でお願いします。

例

1ーA

2ーa

3ーA，a

アイデア等ある人は文章で書いてください。

投票開始！！　ついでに3万ＰＶ突破記念だよ（後書き）

それでは投票お待ちしております。

子猫の名前も引き続き募集中。

ちなみに、二人ともカードが出たパターンでも無理が出ない展開を考えています。

第１２話　アホどもの宴とアーティファクト！？（前書き）

リアルの問題が片付きました。
マウス直りました。

突然ですが投票を締め切ります。理由はコレ以上粘ると更新できない恐れがあるのです。

結果発表です。

上条のみにもたせると二人にも足せるが同数だったのですが、こちらの独断で二人に持たせるとしました。

アイテム発表

上条　Ｄ　幻想の手甲

美琴　ｃ　雷の姫弓

になりました。

この話の後でカードの説明やアーティファクトの詳細などを書きます。

あと、今回の話はノリが軽いです。コメディ重視です。

第１２話　アホどもの宴とアーティファクト！？

上条＆美琴「／／／」

現在、上条の部屋にて、二人は赤面していた。
まあ、理由は前回美琴がいきなりキスをしたからなのだが、そのあと二人は少し暴走してしまい、何回かキスしていた。
Ｒ指定をつけるならは１５には届かなかったぐらいだろうか。

二人とも途中で我に返り、現状を理解すると同時、恥ずかしくなってしばらく放心状態になってしまったのである。

まあ、しばらくお待ちください。

２０分ほどあと。

美琴（私ってばいきなり何していたのよー！？）

美琴はいまだ帰ってきていなかった。

上条「美琴さーん、大丈夫ですかー？」
美琴（いやでも、うれしかったんだけどでもでも……」
上条「しばらく帰ってきそうに無いな……ん？　何だコレ」
上条のほうは何とか帰ってきたようである。そして、例のカードを見つけてしまったようだ。

上条「コレってまさか……仮契約の……しかも二人分」
上条の手には上条と美琴の絵が描かれたカードがあった。描かれていた服装は前の世界の服装である（冬服）。アーティファクトは二人とも右腕についていた。
上条「……いや、確かにキスはしましたよ。でも魔法陣と描いてないんだけどなんだ？」
美琴「……あれ、当麻どうかした？」
やっと帰ってきました。
上条「いや、これ……」
美琴「え、コレって仮契約のカードよね……なんで？」
上条「さあ？」
美琴（でもコレってキスした証みたいなものよね……エヘヘ）
上条「あ、またトリップしちまった……」
バカップルが壊れていたその頃。カモ＆朝倉のはた迷惑コンビはというと。

カモ「さてさて、早速二枚でたようだぜ」
朝倉「マジで！？」
カモ「ただ……兄貴の従者じゃねぇんだ」
朝倉「まさか、ほかの人巻き込んじゃった？」
カモ「いや、知り合いなんだが……御坂の姉さんと上条の兄さんなんだよ」
朝倉「あー、なるほど」
カモ「まあ、二人に関しては後で説明すればいいか……御坂の姉さんの電撃は痛そうだなあー」
朝倉「お互い付き合っているし、魔法にも関わっているからたぶん大丈夫でしょ（電撃ってどういうこと？）」

朝倉は二人が付き合っており、魔法関係者であることまでは知っているようだが超能力は知らないようである。

朝倉「それよりも動きがあったみたいだよ」
カモ「なに！？」

長谷川&明石「「びぇーん！？」」

朝倉「報道部朝倉より、各班へ。長谷川、明石両名鬼の新田に捕まり正座させられております」
カモ「バカピンクといいんちょが手を組んだみたいだぜ」
朝倉「新情報、バカピンクこと佐々木まき絵といいんちょが手を組

んだ模様。コンビ名はチームネギ君ラブが妥当と思われます」
二人は各班の部屋に現在進行中のネギのくちびる争奪戦の模様を実況していた。
ちなみに、マイクを使っているのは朝倉のみ。カモの声が伝わらないように注意はしている。
カモ「お、双子の嬢ちゃんと図書館のデコが交戦状態みたいだぜ」
朝倉「おお！？　三人とも捕まった！？」

夕映「ふ、不覚……」
双子「「うううぇえええええん！！！」」
夕映「頑張るですよのどか」
新田「私語は慎め！！！！！！！！！」
『は、はい！』
のどか「ゆえ……」
いいんちょ「ネギ先生のくちびるは私のものですわ！」
まき絵「うふふー負けないよー」
古「ネギ坊主はどこアルカネ？」
楓「んー？」

現在、残り人数5人

ネギ？「いいんちょさん」
いいんちょ「！？」

長谷川「あ、メガネ割れてた」
新田「ん、仕方が無い、予備のメガネを貸してやるからついて来い」
長谷川「はい」

明石「いいなー」
夕映「どうせまた戻ってきますよ」

史伽（双子妹）「あしがいたいですー」
風香（双子姉）「ちょっとは我慢しろよー」
ネギ？「史伽ちゃん」
史伽「！？」

まき絵「ネギ君どこかなー？」

のどか「ネギ先生はお部屋に……アレ？　いません」

その頃、見回り中のネギは。

ネギ「なんだろう、嫌な予感が……早めに戻ろう」

のどか「あうーいません」

ネギ？「宮崎さん」
のどか「あ、ネギ先生」
ネギ？「キス、しましょう」
のどか「！？」

ネギ？「今から史伽ちゃんのくちびるを貰います」
史伽「！？」
風香「なんですと！？」

明石「なんか、とんでもないことに」
夕映（変ですね、ネギ先生はあんなこと言うはずが無い。ましてや、のどかの告白があった日にすることじゃないです）

ネギ？「いいんちょさんキス、シテクダサイ」
いいんちょ「なんですってえええええええええええええ！？」

まき絵「うえーん、ネギくーん」

方向音痴だったまき絵。いいんちょとはぐれたため結局一人で行動している。

古「なんだか、取り残されている気がするアルヨ」
楓「ニンニン」
ネギ？「古さん」
古「お、ネギ坊主」
楓（コレは……本物ではござらんな）
古「どうしたアルカ？　は！？　まさか私にキスを」
ネギ？「はい、キスしにきました」
古「……アル？」

楓「これはこれで面白いからいいでござるか」
ちょっとSだった楓であった。

朝倉「おおおお！？　新田に捕まった鳴滝史伽、そして古、いいんちょ、宮崎のどか四名がキスの体制に！？」
カモ「いや、なんで四人いるんだよ」

ちなみに各班の反応は『おおー！』だった。

のどか「あうあうあうあうあうあうあうあうあう」
朝倉「おーっと本屋は逃げ出した」
ネギ「あ、でもそのうち追いつかれるな」

いいんちょ「ネギ先生失礼します……プペッ！？」

朝倉「なんと、ネギ君に一番にキスしたかに思われたいいんちょ。ネギ君が爆発し、吹き飛んだ！？」
カモ「ありゃ偽者だな」
朝倉「どうやら、偽者だった模様。なお、放送席も何が起こっているか良く分かっておりません！」

ネギ？「あのー」
風香「なんで史伽なんだよ！？」
史伽「お姉ちゃんは乱暴だからですー！！」
ネギ？「んちゅ」

史伽「！？」
風香「あ……」
ネギ？「ボフッ」
史伽「ふあああああああ！？」
風香「……爆発した……だと」

古「にゃーアル！？」
ネギ「ゲフッ……ボフッ」
古「消えたアル！？」
楓「偽者だったようでござるな」
古「偽者だたアルカ」

朝倉「なんと、宮崎を追いかけているのを除きネギ君は偽者だった。ということはアレが本物か！？」
カモ「いや、兄貴はあんなことしねえからアレも偽者だろうな」

まき絵「ネギくーん」
ネギ「僕がどうかしましたか？」
まき絵「ネギ君！？」

朝倉「おーっと、佐々木まき絵がネギ君と遭遇！　果たしてどちらが本物か！」

まき絵「ネギ君、ちょっと目つぶっててくれる？」
ネギ「？　いいですけど」
まき絵「んーチュッ」
ネギ「！？」

まき絵「えへへーおやすみ！」

朝倉「なんと、一位は佐々木まき絵だー！」
カモ「ヨッシャー、カードゲット！！！」

ネギ「？　ああ、おやすみの挨拶ってことか」

ネギは上条より鈍感だった。いくら１０歳でもキスされたら分かるだろうに。

夕映「どうやら、まき絵さんが勝ってしまったようですね」
明石「それ本当？」
夕映「ハルナからの連絡だとそのようです。まだチャンスはあるようですが」

のどか「あうあうあうあうあうあうあうあう」
ネギ？「むふふふふふー」

ネギ「あれ、式神が暴走している！？　宮崎さん伏せて！！」

のどか「！？　はい！！」

ネギ「はぁ！！」
ネギ？「ゲフッ」

のどか「ネギ先生が二人？」

ネギ？「ボフン！」

のどか「え？」

ネギ「すいません宮崎さん、誰かのいたずらみたいですね」

のどか「あ、そうですかー」

ネギ（魔法のことばれるかと思ったー）

のどか「あ、安心したら腰が抜けて……」

ネギ「あ、大丈夫ですか？　手を貸しますよ」

のどか「ありがとうございます」

ツルッ

のどか「きゃ！？」

ネギ「わ！？」

チュッ

のどか「あ、あ／／／／／／」

ネギ「／／／」

のどか「あうあうあうあうあうあう」

朝倉「なんと二位は宮崎のどかだ！！」

新田「ネギ先生、なにやっているんですか？」

ネギ「！？」
新田「まったく先生まで生徒と一緒になって遊んで」

朝倉「カモッちカードは何枚出た？」
カモ「成立カード４枚（うち二枚はバカップル）。スカは２枚の計６枚だぜ」
朝倉「大掛かりな割には情けない成果だったけどずらかるよ！」
新田「なるほど、お前が主犯だな朝倉和美」
朝倉「に、新田先生」
新田「おまえも朝まで正座しような」
朝倉「い、イヤー！？」

その後、元々正座していたメンバーに加え、ネギ、朝倉、なんだかんだで見つかった古と楓は朝まで正座させられたのであった。なお、カモも正座させられていた。

ちなみに宮崎のどかと佐々木まき絵両名は朝まで部屋にこもってあうあう言っていた。

アスナ「なんか平和ねー」
刹那（この型紙は……まさか、今回のおおもとの原因は私なのか？）

あながち間違いではない。身代わりの式神の説明をちゃんとしていなかったためである。

上条「ところで、コレ」
美琴「どうしよう」

なお、カードをどうしたらいいかこの二人も悩んでいた。

そして、朝がやってくる。

朝倉「じゃあ、商品授与」

正座から解放された後、朝倉とカモはのどかとまき絵に商品のカードを渡していた。

のどか「えへへー」
まき絵「やたー！」

一般人に仮契約のカードを渡していいのかは疑問だが。

アスナ「ちょっとどうするのよネギ、こんなにカード作って。しかも二人も成功しているじゃない」
ネギ「ぼ、僕の責任ですか！？」

いや、朝倉とカモの責任だろうな。

朝倉「まあまあ、いいじゃない別に」
カモ「ソウスッよ姐さん」
アスナ「朝倉とエロガモは黙ってて！！」
カモ「なんすかその不名誉な名前は」

ちなみに現在、上条の部屋にて会議中。メンバーは上条、美琴、ネギ、アスナ、刹那、カモ、朝倉である。

上条「つーかコレどうすればいいんだ？」
カモ「いや、お二人さんについては予想外だった。まあ、二人に関してはこれからも色々と巻き込まれるからもっておいてそんはねえと思うんだけどよ」
アスナ「そりゃあ、そうかもしれないけど、宮崎さんとまき絵ちゃんは一般人よ」
刹那「カードは景品だから仕方が無いかもしれませんが、魔法使いだということをバラしてはいけないでしょうね」
カモ「まあ、渡したのはカードのコピーだし、使い方を教えなけりゃ大丈夫だろ」
アスナ「使い方？」
カモ「おうよ。ちょうどいいから説明しておくぞ」

カモ曰く、カードをもって『アデアット』と言うとアーティファクトが出てくる。『アベアット』と言うとカードに戻るそうだ。

カモ「ちょうどいいから三人ともやってみてくれ」

アスナ「なんかやだなぁ」
美琴「そう？」
上条（男には恥ずかしすぎる気がする）

『『『アデアット』』』

アスナ「わ、ほんとに出た！　凄い手品に使えるよ！！」
カモ「いや、ちゃんと使えよ」

上条「あれ、服装が……」
美琴「変わっている？」

なぜか、アーティファクトに加え上条と美琴はカードの服装になっていた。

カモ「それはカードのおまけ機能だな。もともとの服装に加えいくつか登録できるんだが……登録してないよな？」
上条「向こうにいたときの学生服なんだが」
美琴「私も」
カモ「仮契約の精霊がくれたんじゃねえか？　規制ゆるいし」
上条「そういうもんか？」

しばらく観察した後、しまうことにする。

『『『アベアット』』』

上条「お、元に戻った」

美琴「ホントだ」

ちなみに、美琴の現在の服装は分かると思うが、上条は私服である。学校ではブレザー。

アスナ「とにかく、内緒にするのよ」

カモ「わかりましたよ。それにしても惜しいな。あの二人のアーティファクトかなり強力なものみたいなのに」

カモは惜しいなーと口にしていた。

カモ（まあ、この三人のは別格みたいだけどよ）

そして、この光景を見ている者たちがいた。

のどか「よく聞こえませんでしたが手品みたいですね」

まき絵「えと……なんて言うんだっけ？」

この二人は、自由行動にネギを誘うために来たようだが、中の様子をのぞいていた。

アスナが騒ぎ始めたあと、少しはなれた場所でカードを使うことにしたようだ。

のどか「えっと、確か……『アデアット』」

すると、のどかの前に一冊の本が現れた。

まき絵「凄い凄い！　わたしも『アデアット』」

まき絵の前にはアイテムがアーティファクトである新体操につかうようなリボンが現れた。

まき絵「凄い、コレで持ち運びが便利だ！？」
のどか「それよりもどこから……！？」
まき絵「どうしたの本屋ちゃん」
のどか「あうあうあうあうあう」
まき絵「ん、なになに……え！？」

二人が驚いている理由。それはのどかのアーティファクト『いどのえにっき』がのどかの心の中を絵日記風に映し出したから。

まき絵「これって……」
のどか「あうあうあうあう」
まき絵「わたしのも何か出来ないかな……えい！」

リボンはどこまでも伸びた。

まき絵「凄い！」

夕映「どうしたのですかのどかにまき絵さん」

のどか「！？」

夕映「おや、面白そうな本ですね」
のどか「これはダメ！！」
夕映「む、そうですか……」

のどか（この本は……とってもマズイ本なのでは？）

ハルナ「なにやってんのよネギ君を捕まえるわよ！！」
のどか「わ、ハルナ！？」
まき絵「あ、私も連れてってー！！」
夕映「（ここで断ると面倒な人たちもついてきそうですね）仕方がありません。いいですよ」
まき絵「やたー」

ハルナ改めパル「っていないし！！」

ネギは裏口から脱出していた。

ネギ「ふー、脱出成功……」
カモ「兄貴、待ち合わせ場所は分かっているよな」
ネギ「もちろんだよ」

本日銃行動。ネギは関西呪術教会の親書をもっていく予定である。
そのため、アスナとともに行く予定なのである。
上条と美琴、刹那は万が一に備え木乃香の護衛。のどかたちもいるので人数が多いほうがいいだろうとの判断。

ネギ「あ、いましたみなさーん……ってええ！？」

なぜか、アスナとの待ち合わせのはずが5班全員＋まき絵、上条がいた。
朝倉は自分の班に行ったようである。彼女はほかにもやるべき事があるのだ！！

まあ、クラスメイトの写真を撮っているだけだろうが。

ネギ「なんでアスナさん以外の人がいるんですか。しかもまき絵さんに上条さんまで」

アスナ「あははは―ごめん」

パル「ほほーう、この人が美琴ちゃんの彼氏か」

美琴「ふにゃー」

上条（気をぬくといつ漏電するか分からないな……不幸だ）

木乃香「せっちゃーん。一緒に見て回ろうなー」

刹那「えと、そのー」

まき絵「なんか、凄い人数だね」

夕映「ていうかまき絵さんは自分の班から離れていいんですか？」

まき絵「大丈夫！！　連絡は取った！！」

夕映「そうですか」

のどか「この本どうしよう」

カモ「カオスだな」

こうして波乱の修学旅行3日目が始まった。

カモ「はぁー不幸だな」

第１２話　アホどもの宴とアーティファクト！？（後書き）

てことでアーティファクト決定。
投票ありがとうございます。
ちなみにネコについては少なくとも修学旅行が終わるまでは出さないと思うので名前は募集し続けます。

ミルクとかいいかなとか思っている。

少しあとで二人のカードの説明などを投稿します。

上条&美琴のパクティオーカード&アーティファクト紹介（前書き）

色々参考にして書きました。
カード説明で間違いなどがありましたらご意見ください。

上条&美琴のパクティオーカード&アーティファクト紹介

上条当麻

数字　？　１０

色　黒

称号　幻想を殺す者

徳性　正義

方位　中央

星辰性　黒い穴

絵柄　もといた世界の冬用学生服。禁書原作１２巻から着ていたもの。

アーティファクト

幻想の手甲

黒色。一方通行の杖を二周りほど小さくしたような盾があり、手袋のような部分もついている。こちらは禁書に出ていたピンセットから爪をはずしたような形である。右手に装着される。

能力

幻想殺しの出力を自在に変えられる。
出力の上限は上条が使用できたものが基準。
０まで出力を落とすことが出来、最大で竜王の顎（ドラゴンストライク）まで可能。
竜王の顎は一定範囲の異能の力を相殺、喰らった相手の記憶消去などいくつか可能なことがある。
出力を調整し、相手の魔法や気騨を消さずに掴むことができる。
また、盾の部分に力を集中することで魔法障壁のようなシールドを作り出せる。
ただし、魔力や気も同時に消費する。
拳の届く範囲の攻撃のみという偏ったスペック。しかも性質上、上条にしか使えない。

御坂美琴
数字　？　５
色　白
称号　電撃姫
徳性　正義
方位　中央
星辰性　太陽
絵柄　常盤台の冬服。禁書原作１２巻から後のもの。

アーティファクト

雷の姫弓

白色。弓は折りたたみ式。細部の形状は上条のものに似ている。

能力

弓に電気をためることで矢を作り出す。レールガン並みの威力を誇りながら、命中精度が高く、飛距離も長い。ただし、チャージにある程度の時間がかかり、なおかつ、真っ直ぐにしか飛ばせず、矢も小さい。使いどころを考える必要がある。魔力付加などで炎を纏わせたりできるが、基本は電撃で出来ている。このため、いくつか弱点もある。

強大な電力が必要な武器のため美琴以外には使いこなせないであろう武器。

上条&美琴のパクティオーカード&アーティファクト紹介（後書き）

二人のアイテムを対応させようと色々考えました。
オーバースペックにならないようにしてあります。
竜王の顎は滅多に使えない仕様となっています。

ちなみに、二人の行いは周りから正義と言われているから徳性が正義であると判断しました。

学園祭編では衣装を増やそうと画策中。

ネタで一方通行と浜面のカードも考えようかな？
インデックスのカードもネタ程度だけど考えてある。
まあ本編には絶対に出ないけど。

登場人物紹介　その２　ネタバレ注意　ヴァージョン１（前書き）

ノリですよノリ。

カモと朝倉の名コンビの紹介ですよ。

話が進むにつれて更新。

登場人物紹介　その２　ネタバレ注意　ヴァージョン１

カモ君

フルネームは二度と出ないと思うから省略。

妹がいるらしい。パンツ泥棒の罪がある。
エロ大王なオコジョ。
人の好意をはかる能力があり、結構正確な数値が出るようだ。
本人はスーパーアビリティと言っている。
タバコを吸っている。
金の亡者でもある。
人情には厚い男であるので、根はいい奴。
ネギにパクティオーさせようと暗躍する。
不幸属性に近い自業自得。
生命力がとてつもない。

朝倉和美

カモと相性のいい人その１
報道部。パパラッチ根性の塊。学園側も時々困る。
また、貧乏くじを引きやすい。自業自得な場合も多いので不幸ではない。
パパラッチ根性丸出しの人物に誤解されやすいが、公表したらだめな情報には手をつけない。ただし、本人が自覚した場合のみ。
金の亡者になったり、時たま暴走するが、根はいい人。
立ち位置的に女版カモのような人物。
カメラなどを常に持ち歩いているようだ

登場人物紹介　その２　ネタバレ注意　ヴァージョン１（後書き）

好き勝手書いてるけど、ここではこんな扱いです。
まあ、二人とも活躍するけど。

第１３話　波乱の修学旅行三日目開始（前書き）

あ、４万ＰＶ突破したよ。ユニークは５千突破。

一つ言っておこう。明確な主人公はこの小説にはいないんだ。話の流れで主軸になるキャラが変わるからね。

活動報告もたまには見てね。

第１３話　波乱の修学旅行三日目開始

大所帯になってしまったネギ一行。現在、ゲームセンターにいる。

上条「てか、京都に来てまでゲーセンかよ」

ごもっともな意見である。

ゆえ「まあ、京都限定のものもありますし、一概には否定できませんよ」

上条「そうなんだろうけど……美琴がものすごい勢いでコインばっかり増やしているのを見るとな」

上条の目にはメダルゲームをものすごい勢いでプレイする美琴の姿があった。

ゆえ「たしかにちょっとひく光景です。そういえば上条さんは何故京都に？」

上条「あー、学園長に用事頼まれたんだよ。そのついでに親戚の家に行っていた。修学旅行にあわせれば何とか経費で行かせられるからって」

ウソと本当のことが混ざっているが、あの学園長は基本的に何をやっても信じられるので別段気にする必要はなし。

むしろ、まほらの生徒は何があっても『まあ、まほらだし』で済ませることが多い。

ゆえ「そうですか」

ゆえも例に漏れなかったようである。

ネギ「疲れましたー」

ネギたちはプリクラを撮っていた。
ネギはアスナ、のどか、まき絵とそれぞれ撮っていたようである。
ちなみに、木乃香は刹那と撮っていた。

パル「んー、なんかラブの臭いがするなー」
アスナ「美琴ちゃんたちじゃないの？」
パル「いや、複数するんだよねー」

のどか「／／／」
まき絵「／／／」
刹那「／／／」

案外侮れない人物である。

美琴「ふぅー、たくさん取れたわね」

美琴はメダルゲームを終えたようである。

美琴「って、持ち帰り禁止かい！！！」

どうやら、レールガン用のメダルを取りにきたようだが、あいにく持ち帰りは禁止だった。

美琴「しょうがない、こっそりと」
上条「やめなさい」
美琴「……分かったわよ。その代わりプリクラ撮るわよ」
上条「へいへい」

素直になったが人前ではデレがでない美琴であった。

パル「ぬふふー、だがしかし、顔は赤くなっているのよねー」
美琴「／／／」

ネギ「魔法使いのゲームですか？」
ゆえ「はい、こちらでは限定カードが出るとのことでしたので遊んでいたんです」
ネギ「面白そうですね、僕もやってみましょうか」
ゆえ「スタートセット貸すです」

さすが天才少年といったところか、初めてにしてはなかなかの腕前のネギ。

このか「さすがネギ君やね」
パル「初めてとは思えないわね」

???「隣入ってええか？」

ネギ「うん、いいよ」
パル「お、ネギ先生勝負だよ」
このか「がんばれー」

しかしそこはやっぱり初心者。隣に入ったネギと同い年くらいの少年に負けてしまった。

ネギ「あー負けちゃった」
???「いや、なかなかのモンだったで。でも魔法使いとしてはまだまだやなネギ・スプリングフィールド君」
ネギ「え、僕の名前なんで知っているの？」
???「いや、スコアに出てるで」
ネギ「あ、自分で名前入れたんだった」

???「ほなな」

のどか「あうー」

ドンッ

のどか「キャッ」
???「いてっ」

のどか「あたた」
???「なはは、ごめんな姉ちゃん」

その後、パルやゆえが遊びに夢中になった隙をみて、ネギとアスナ

は親書を届けることにした。

ネギ「では桜咲さんお願いします」
刹那「ネギ先生もお気をつけて」
アスナ「美琴ちゃんたちもヨロシク」
美琴「まかせて」

???「やっぱり苗字スプリングフィールドやったで」

少年、犬神小太郎は木乃香を狙っている女、天ヶ崎千草と合流した。

千草「やはり、サウザンドマスターのやったか、それやったら相手にとって不足はあらへんな」

千草の後ろには化物とつくよみ、そして謎の白い少年がいた。

千草「一昨日の借りはきっちり返させてもらうで、坊や達」

アスナ「さあ、いくわよネギ！」
ネギ「はい！！」

のどか「どこにいくんだろネギ先生」
まき絵「追いかけてみようか」

このか「あーまけてもうたー」
パル「はっはっは、私に勝てると思ったら大間違いよ！！」
ゆえ「次は私です」
美琴「平和ねー」
刹那（お嬢様、いい笑顔だな）

上条（人数が足りない気がするんだが気のせいか？）

上条「なあ、桜咲さん」
刹那「どうかしましたか上条さん」
上条「なんか人数が減ってないか？」
刹那「ネギ先生たちがいないからでは？」
上条「それを差し引いても少ない気がするんだが」
刹那「お嬢様はいますし、図書館の三人……あれ？　二人……
あ――――！！！！！！！！！！！！！」
このか「せっちゃん、どうかしたん？」
美琴「何かあったの？」
刹那「いえ何でもありませんお気になさらず」
このか「ならええけど」
刹那（御坂さん、ちょっと話がありますこちらへ来てください）
美琴（え、うん。分かったわ）

このか達から少し離れた物陰。

刹那「大変なことになってしまいました」
美琴「一体どうしたの？」
刹那「宮崎さんと佐々木さんがいなくなってしまいました」
美琴「まさか誘拐！？」
刹那「いえ、あの二人のことですからおそらくネギ先生たちを追ってしまったのではないかと」
上条「で、どうするんだ？」
刹那「一般人の二人が巻き込まれる危険もありますのでお二人にはネギ先生のところへ向かって欲しいのです」
美琴「でも木乃香さんは大丈夫なの？」
刹那「それなら人目の多いところへ向かいます。さすがに街中で手出しは出来ないでしょう」
朝倉「いやー無理だと思うよ」
上条「確かに誘拐なんて考える奴らが人目を気にするとは思えないし、一昨日も魔法をバンバン使ってきたし……って」

「「「何故ここにいる！！！」」」

朝倉「どもどもー」

いつの間にか現れた報道部パパラッチ娘、朝倉和美。彼女は神出鬼没だった。

朝倉「上条さんの言うとおり、相手は手段を選ばないと思うよ。だったら守りが堅いところに行ったほうがいいんじゃない？」
刹那「うっ、確かに一理ありますね」
朝倉「それに、京都って映画の撮影とかにも良く使われるし、偽装するかもよ」

刹那「うう」
朝倉「人目が多いところで桜咲さん一人で守りきれるの？」
刹那「うう……たしかに、朝倉さんの言うとおりです」
朝倉「で、どうするの？」
刹那「仕方がありません。お嬢様をつれて本山に向かいましょう」

刹那「お嬢様ー」
このか「せっちゃん、どないしたん？」
刹那「今からお嬢様のご実家へ向かいましょう。神楽坂さんたちと合流します」
このか「え？」

美琴「そういえば朝倉さんはなんでここに？」
朝倉「報道部としての勘がここにいけって囁いたんだよ」
上条（もう、それって一つの能力なんじゃないのか？）

パル「さて、みんな行くよ……って誰もいない！？」
ゆえ「……不幸です」
パル「ええい！　のどかに電話して早く！！」
ゆえ「はいです」

のどか「あ、ゆえからだ」
ゆえ『今どこにいるですか？』
のどか「えっとね……」
ゆえ『わかりましたすぐ行くです』

刹那「そうだ、ネギ先生たちのところに伝令用の式神を」
刹那が型紙を取り出し、呪を唱える。

ネギたちはというと。

ネギ「ここが本山」
アスナ「大きいわね」

???『大丈夫ですか神楽坂さん！！』

アスナ「うわ！？」
ネギ「刹那……さん？」

???『はい、連絡係の分身のようなものです。ちびせつなとお呼びください』

ネギ「は、はあ……」

ちびせつな『今、お嬢様たちとそちらへ向かっています。ネギ先生たちは』
アスナ「分かったわ親書を届けるのね！！」
ネギ「アスナさん！？」
アスナ「いくわよ——！！」
ネギ「ちょ、腕引っ張らないでくださいー！！？？」
ちびせつな『いえ、そこで待っていて欲しいというつもりが……あ、

待ってください！』

小太郎「来た来た」
千草「あんたはあいつ等の足止めをしとき、うち等は木乃香お譲さまをいただいてくるさかい」
小太郎「こんなちまちました作戦嫌いなんやけどなー」

のどか「ネギ先生たちはどこでしょうか？」
まき絵「ネギくーん、どこー？」

波乱の修学旅行三日目は、まだ始まったばかりだ。

上条「なんだろう、凄く不幸な予感がする」

第１３話　波乱の修学旅行三日目開始（後書き）

とりあえず、今回はここまで。
朝倉が神出鬼没になってますが気にしないでください。
次回はネギがメインです。バトルな話になりますよー。
進行速度がアレなんでシネマ村のくだりはカットです。
バトルシーンは何とか作るけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5607w/

とある白き翼の奮闘記録

2011年9月29日19時36分発行